

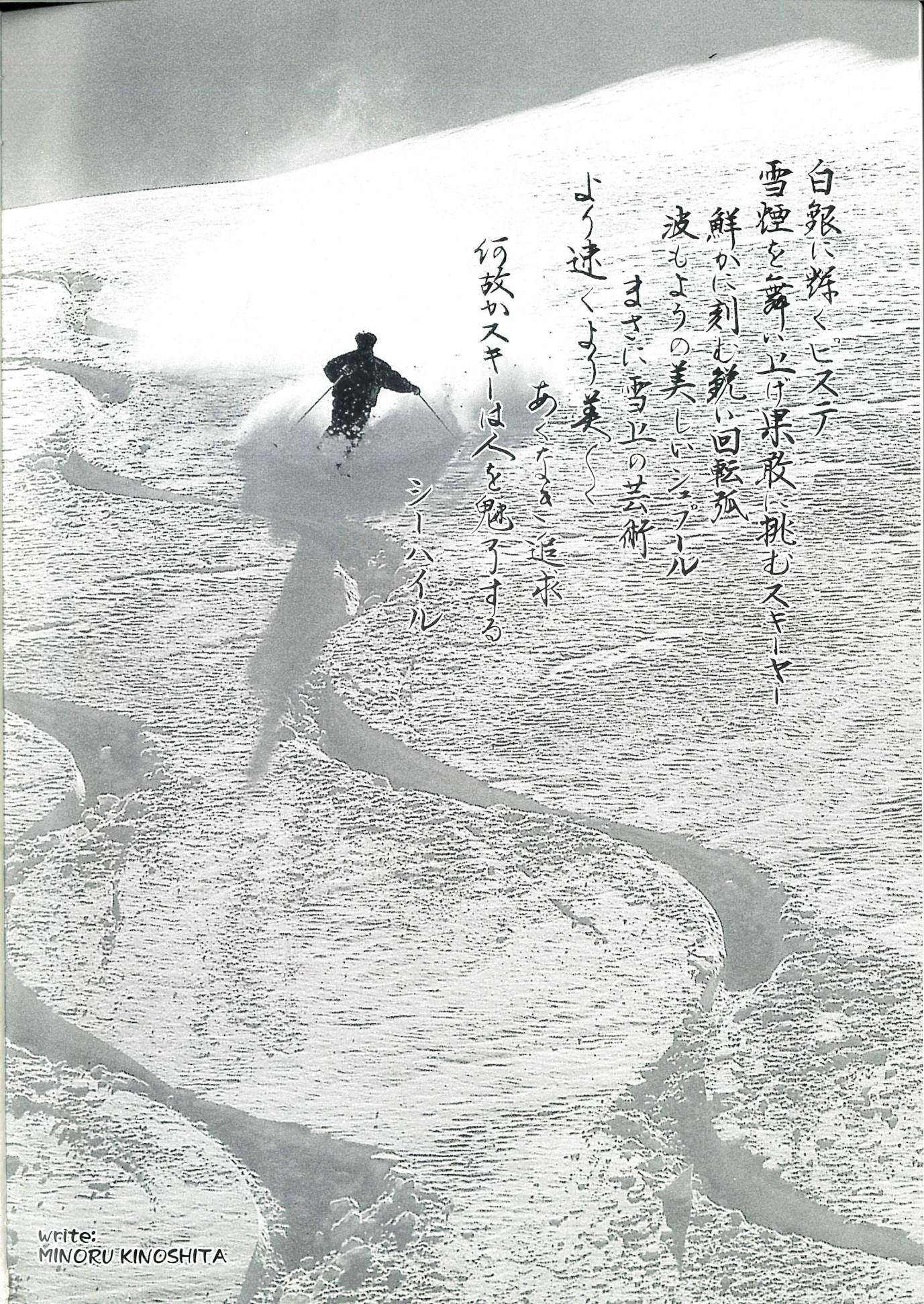
創立50周年

記念誌



綾部市スキー協会





白銀に輝くピステ  
雪煙を舞い上げ果敢に挑むスキーヤー

鮮かに刻む鋭い回転弧  
波もよりの美しいインプット

まさに雪上の芸術

よう速くよう美しく

あくなき追求

何故かスキーは人を魅了する

シーハイル

write:  
MINORU KINOSHITA



# 目 次

会長挨拶 .....	1
来賓祝辞 .....	3
50年のあゆみ .....	12
歴代会長 .....	19
表 彰 .....	20
年 表 .....	21
<b>各部のとりくみ</b>	
クラブ対抗競技会 .....	27
市民スキー大会 .....	29
四都市冬季大会 .....	30
志賀高原スキー教室 .....	35
ジュニアの発展について .....	37
<b>回想の記</b> .....	48
綾部市スキー協会規約 .....	68
平成11、12年度綾部市スキー協会役員名簿 .....	71
あとがき .....	72
付 50周年記念式次第、式辞 .....	74

## 創立50周年を迎えて



会長 木下 實

私どもスキー協会が、まとまりのある組織として活動を始めてより本年で50年に及ぶ歳月を歩んで参りました。

この半世紀の節目を迎えるに当たって「温故知新」初心に還り、その歩んで来た道程と足跡をしっかりと踏まえ、新しい21世紀に向かって更なる発展を期すため、今日までの到達点とその成果に学びながら課題を明確にして解決を図る方策を模索していかなければなりません。

そこで今到達して参りました点を総括してみますと、協会が質・量ともに変容せざるを得ない時期に直面し、又その機会があった事であります。その具体例を挙げますと次のような事項であったと思います。

先ず第一に、四都市スキー大会がオープン競技から正式の競技種目となり、大会参加の体制づくりが命題となった事があります。もともとスキー人口も少なくましてや競技に参加するとなると、その人材確保も当初はなかなか大変な事でありました。協会が目ざしておりましたスキー人口の底辺の拡大が、競技力の向上の土台づくりの役割を背負いその活動が益々重視されていきました。

次に、スキーの普及発展を図っていく上でもっとも苦慮した点は、指導者の確保でした。当初（S30年代～40年前半位）宮津の方から指導者を招致しての技術の習得をめざし、指導力の育成を図っていたが、そんな中で協会としても指導者の育成が焦眉の課題となり関係者の中でその対応について検討の結果、指導員の養成上京都府スキー連盟に加入していることが前提条件である事から早速加盟の手続き（宮津スキー協会の推薦を受けて）をとり承認を受ける運びとなりました。

この承認が協会の諸活動の上に大きな弾みとなったことはいうまでもない事であ

ります。

更に昭和50年代に入った頃、志賀高原のスキー学校で活躍していた地元出身の方が家業の都合もあって帰郷されたのを機に協会の活動に参加を乞い技術の指導に協力をおねがいしました。この事が技術向上に大きな力になったことはいうまでもありません。

第三に、組織と運営面を個人加入からクラブ制を採り入れて活性化を図った点で、やや慢性化していた活動もクラブ間の競争意欲を盛り上げ9クラブ・200人を越える組織体制となりました。毎シーズンクラブ対抗の競技会を開催し競技力の向上にも大きな力となりました。

尚、スキー人口の底辺の拡大・競技力の向上を求めて強化を図っていく上で、ジュニアの育成が基礎であるという観点から平成3年以降指導体制を整え、親の会と連携しながら活動を進め、今ではジュニア出身者が有資格の指導者として活躍するまでになっています。

以上のような到達点を軸に今後の活動を展望しますとき、「継続は力なり」を実感致しますと共に、時の流れの中で築き積み上げてきた遺産を今日的な視点からとらえ直し、新しい21世紀に向けて機軸をすえて方向を見定め活動の方針・方策の策定をしなければならないと思います。

幸いにも組織内に有能な若年層がリーダーとして活躍しており、大きな期待が寄せられています。このような中で組織の新陳代謝を図り、活動を展開していくことが何より重視されなければならないと考えております。

終わりになりましたが、今日まで協会にお寄せ戴きました諸先輩方や各界各位の方々のご高配ご支援に対しまして深甚の敬意を表しますとともに、併せて今後とも変わりませぬのご指導のほどよろしくお願い申し上げご挨拶と致します。



— 50周年に寄せて —

## スキー人口の増加を！



綾部市長 四方 八洲男

文字通り風雪を踏みしめて幾歳月。

綾部市スキー協会におかれましては、この度めでたく50周年をお迎えになりましたこと、心よりお喜び申し上げます。

私も下手ではありますが、スキーのすばらしさは今も身体に沁みついております。初めて行ったのは中学3年生の時。夜久野駅の裏にあったスキー場でした。綾高の副校長だった磯貝勇先生、浩君親子と一緒にしました。浩君と同級だったのです。磯貝先生からは、スキーの技術より、雪洞を掘ること、コッフェルや飯盒で食事を作ることをもっぱら教えていただきました。磯貝先生は日本で有数の民俗学者でした。

以来、熱中していた時は、年に20日ぐらい行きました。

汗がいい。緊張感がいい。夕日の沈む山々を眺め民宿に戻るその疲労感がいい。風呂上がりのビールがいい。仲間がいい。下手は下手なりにマイペースでやれるのがいい。これほどいいことずくめのスポーツはなかなかありません。綾部の子供たちにぜひ近くでスキーをやらせたい。そんな想いでいっぱいです。

スキー協会の皆さんもぜひ、各種の企画を作ってください、綾部市のスキー人口を増やしていただかんことお願い申し上げます。

私も足腰を鍛えて、時間をつくって、20年前の靴を引っ張り出して、皆さんのお伴ができるようにと願っております。

末筆になりましたが、綾部市スキー協会の木下会長様をはじめ皆様様の益々のご活躍とご健勝を心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

## 祝 辞



京都府綾部地方振興局長 鈴木 眞咲

綾部市スキー協会が創立50周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

スキーの魅力に惹かれその普及向上を目指した同好の諸先達の手により、綾部の地に協会組織を立ち上げられて半世紀。その揺籃時にあってはいまだ戦後の混乱、物不足が続く時代ゆえ、おそらくは組織的に用具を調達したり、スキー場に出かけることすら大きな困難があったことと存じます。そんな時代を乗り越えられ、今日まで大きく育て上げてこられました関係の皆様のご苦勞に対しまして、心からの感謝と敬意を捧げるものです。

この50年を振り返りますと、日本の社会経済はめまぐるしい変化をしてまいりましたが、その中でスキーを取り巻く環境も一変してしまいました。日本の経済成長につれてレジャー志向の流れが大きく進み、大衆的大規模スキー場の開発や用具の改良発達などによって、スキーの大衆スポーツ化が著しい勢いで進んでまいりました。スキーの愛好者は老若男女を問わず、地域を問わず、そのすそ野が大きく広がってきました。もちろんスキー愛好者と言ってもその志向するところは一様ではありませんし、昨今のスキー場のファッション化、レジャーランド化には眉をひそめる向きもありますが、スキーという生涯楽しめるスポーツに出会った人々は幸いなるかな。貴協会は、職域クラブを中心とした組織であるとお伺いしておりますが、市民の中の潜在的スキー愛好者が今後生涯スポーツとして息長く続けていくための組織的なバックアップを期待するものであります。

貴協会が市民に愛されるスポーツ団体として、これまでの歩みを礎に、更に21世紀に向けて、大きく発展されますことを、そして木下会長様をはじめ会員の皆様様の御健勝、御活躍を心から祈念申し上げまして、お祝いの言葉といたします。



## 祝 辞



京都府スキー連盟  
会長 小谷隆一

綾部市スキー協会創立50周年、誠におめでとうございます。

半世紀に亘って貴スキー協会の発展に寄与し、スキーの普及に係わってこられた綾部市スキー協会の諸先輩方のご尽力と情熱に対して衷心より敬意を表します。

思えば、昭和の20年代といえまだ戦後の混乱期であり、いろんな物資も不足しており、ましてやウインタースポーツとしてのスキーなどよく知られていない社会状況下で、しかもスキーの環境的条件に恵まれない綾部市にあって、いち早くスキー協会を設立された勇気と慧眼に敬服するものです。

また、貴スキー協会はこれまでに数々の行事を計画・実践されており、今日まで楽しいスキーの普及に力を注がれて、会員相互の親睦を図り、生涯スポーツとしてのスキーを奨励されておられることは、今まさに社会が必要としているところであり、そしてそれこそが私達の願いであります。

京都府スキー連盟も来年で70周年の節目を迎えますが、これまで当スキー連盟の諸行事に対する貴スキー協会のご協力に感謝を申し上げ、併せて今後とも変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げます。

終わりにあたり、21世紀の幕開けの年に50周年を迎えられる綾部市スキー協会が今後ますます発展されますことと、貴スキー協会所属の会員の皆様方のご健勝を祈念してお祝いの挨拶とさせていただきます。

シーハイル

## スキー協会創立50年 お祝いの言葉



(財)綾部市体育協会  
会長 久下壽夫

財団法人綾部市体育協会の法人設立10周年記念誌によれば、スキー協会の設立は昭和32年1月、体育協会への加盟は同年4月となっている。

しかし、協会としての形を整え、実質的な活動を始められたのは、これより先、昭和25(1950)年からであった。それでこの年から数えて、本年平成12年は、満50年の節目の年に当たるわけである。

初代会長は当時長岡医院勤務の徳田医師であった。第二代磯貝勇氏以下、四方八郎、山下芳松、吉野雄策、今枝俊次の各氏を経て、現在は第七代木下實氏である。

市内にスキー場を持たない綾部市にあって、歴代会長を始め、荻野昭、山下信幸、久木康弘、上原季司の各氏等、役員の方々は、綾部市におけるスキー競技の普及、スキー人口の増加に、多大の努力を重ねられたのであり、四都市体育大会冬季大会などの出場選手の選考や練習には、ご苦勞が多かったと想像される。

昭和60年10月に、今枝俊次氏が京都府スポーツ賞を受賞されたのを始めとし、平成9年には木下實、森山頼夫の両氏が、四都市体育大会冬季大会特別功労者表彰を受賞された。その間、上原幸一、岩上保、荻野昭、山下信幸、久木康弘の各氏が、それぞれ、綾部市スキー協会功労者表彰、綾部市体育協会表彰を受賞された。そして、例年、市民スキー大会、クラブ対抗スキー大会を開催し、綾部市民のスキー競技に対する関心と普及に努められてきた。

また、近年ジュニアの育成に重点を置き、次代を担う選手の養成に努力を重ねてこられた。

改めて皆様方のご功績に敬意を表し、お礼を申し上げますと共に、会員の皆様方の更なるご発展をお祈りし、お祝いの言葉とさせていただきます。



## 祝 辞



福知山スキー協会  
会長 辻本忠雄

綾部スキー協会が、創設50周年を迎えられましたことを、先ずもってお祝い申し上げます。福知山スキー協会よりもひと足早く発足された貴協会が、半世紀に亘り幾多の困難を乗り越えられて協会の充実、発展に貢献されました木下会長を始めとし、諸先輩の役員さん方のご努力とご苦勞に対しまして深甚なる敬意と感謝を申し上げたいと思います。貴協会は、各クラブの会員様が加盟されて結成されていると承っておりますが、各クラブのスキー愛好者の輪が広がりますことを念じております。

ウインタースポーツの華として隆盛を極めたスキーも、札幌冬季オリンピックが契機に拍車がかかり年々競技スキーが急増し、100分の1秒を競うまでに至りました。近年特にスノーボードが増加し、スキー場の混雑が目立つようになり時代の流れを感じさせられます。

50周年を節目とされ来る21世紀に向けて更なるご発展と、時代のニーズに対応する協会として益々ご発展を祈念しお祝いの言葉といたします。

## 祝 辞



宮津市スキー協会  
会長 直田幸一

綾部市スキー協会の皆様、この度設立50周年をお迎えになられました事誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。又その上私共まで祝辞をのべさせていただく機会をいただきました事に対し、感謝を申し上げる次第でございます。

一口に50年と申しますが、その道のりは大変長くご苦勞の積み重ねであった事と思います。50年の歴史を築き上げてこられました諸先輩方、又現在ご活躍中の協会員の皆様方のご努力に対しましても深く敬意を申し上げます。

しかしながら現代の社会情勢は、私達スキー愛好者にとりましてなまやさしい時代ではないと思います。自分の好きな事に対してはどんどん取り組んでいきますが、団体として一つの物事を成功させるという精神がうすれてきている事も事実ではないでしょうか。

しかし、このような時代こそ長年の歴史が生きてくるものと思います。さまざまな苦難を乗り越えてこられました諸先輩方の証として50年の歴史が生まれたものと思います。

綾部市スキー協会と私達宮津市スキー協会とは、四都市の冬季大会などを通じまして目的達成のために努力いたしている所でございますが、これを機になお友好の輪を広げていきたいと考えます。

終わりにになりましたが、綾部市スキー協会がますます発展され、21世紀に向かって力強く第一歩を踏み出されますよう祈念いたしまして、誠に粗辞ではございますがお祝いの言葉とさせていただきます。



## 祝 辞



舞鶴スキー協会会長  
林 三 弘

綾部市スキー協会創立50周年誠におめでとうございます。

綾部市スキー協会におかれましては、本市スキー協会とは、北部四都市を構成する市として、ともに競い、交流を続けてきた間柄でございます。

スキー人口が減少している中にもかかわらず、地道な活動のもと競技力の向上に取り組み、最近の冬季四都市体育大会や京都府クラブ対抗スキー大会でも相当の好成績を収められる状況を見ますと、本市の低迷に比べ、たいへんうらやましく思っております。

これもひとえに、木下綾部市スキー協会会長様をはじめ、協会員の皆様方の日々の活動の賜でありまして、本市スキー協会も手本として、今後の活動を進めていきたいと思っております。

雪不足での行事の中止や厳しい環境も予想されますが、隣接市として、今後とも一緒になってスキー競技の普及及び親睦に努めてまいりたいと考えております。

最後に、綾部市スキー協会の今後ますますのご発展をお祈りしてお祝いの言葉とさせていただきます。

## スキー今昔物語



綾部市スキー協会  
4代会長 山下芳松

本年は市制50周年。期を一にして綾部市スキー協会創設50周年を迎えられ、心から祝福申し上げ、新世紀へ向けての大飛躍を祈念いたします。

スキー術が日本に伝えられて約100年。80年前の子ども時代、担任の先生が最新式のスキーで、学校近くの坂をテレマーク姿勢で颯爽と滑った姿が、今も眼底に焼きついている。私もいつかはの夢が実現したのは、昭和8年のことであった。早速成相スキークラブ員となり、先輩の手解きを受けたのが病みつきとなる。

当時のスキー競技は距離競技が中心。荻原選手の複合で見る如く、細いスキー・長い杖そして頭から湯気を立てながらの力走。回転競技の本格化は昭和10年前後で、関西では伊吹山中心に競技会が開催され始めた。

戦前戦後、綾部市には山スキーに練達の士が多く、冬の鉢伏・蘇武・氷ノ山を踏破された話もよく耳にした。リフトが無ければ成り立たない現代スキーと対比して、隔世の感ありである。

教育委員会が発足して、社会スポーツの振興にも力点がおかれた。雪にも、スキー場にも恵まれない綾部市では、スキー人口の拡大と組織化は重要課題であった。当時事務局勤務の私は、市内有力企業・役所・学校等を訪問して、協会加入をお願いした。当時年会費100円で、150名程度の入会者と記憶する。シーズン数回のバスツアーが精一杯の事業であった。四都市冬季大会開催とともに、技術強化が求められたが、一朝一夕に解決できず、北国出身の在勤者に頼ることも多かった。

今冬何十年ぶりかで、協会幹部諸氏の強化合宿を拝見した。組織・技術・チームワークともに頼もしい限りであった。またジュニア育成を協会運営の柱としての活動は誠に心強い。青少年のレベルアップは協会の更なる飛躍に直結するからである。

綾部市スキー協会のご発展をお祈りします。



## “ 灯 ”



綾部市スキー協会  
5代会長 吉野雄策

送られて来た原稿用紙を前に徒らに夜が更け、オンザロックのグラスに様々な思い出が走馬灯の様に走る。昔のスキー仲間が昔のままで現れては消え又現れる。

50年……あっと云う間の50年……雪は毎年降り積もる。神鍋の丘に、鉢伏山に、氷ノ山に、現世にも上林の山にも……若者達は降り積もった新雪の上に年毎に美しいシュプールと共にそれぞれの歴史を刻み重ね合いながら協会の今日を育て上げた。

まことに御同慶の極みと申すべく、新雪の様に美しく輝かしいスポーツマンシップの結集がここに大きく花開いた事を会員の皆様と共に心よりお慶び申し上げます。

就中、雪質、量、地勢のいずれを見てもスキーには絶対不利な条件下にある当綾部地方で50年に亘ってウインタースポーツの花を育て上げられた役員諸氏のご努力、ご苦勞に対し満腔の謝意を表すると共に協会の皆さん方の熱意と愛情で灯されたこの美しい灯が次の世代の若者達を明るく輝し続ける事を希ってお祝の言葉といたします。

## 50年のあゆみ

〈はじめに〉

白銀の世界、パウダースノーに魅せられたスキー同好者が連帯感で結び合い仲間として誕生した小さなクラブが、多くの先輩諸氏のたゆみない活動の中で次第に輪を広げ今日の協会の姿を形成してきた。

その積み上げてきた半世紀の歩みを小史として纏め、新しい21世紀へ踏み出していく土台としてその役割を果たせば幸いである。

### 1. 綾部のスキー（初期）

確かな記録や資料の残されていない中の事とて定かではないが、古老の話によると、当地にスキーが取り入れられたのは大正時代の末期頃（1920年前半）町中の一隅で洋品店を営んでいた「明治屋（屋号）」の店主（吉田品蔵氏）が手始めにやりかけ、やがて近隣の人達や学校の教師へと広まっていったといわれている。

当時はスキー場も近くて夜久野高原（現夜久野駅南側）や遠く神鍋山（岩倉山三本松）の狭い切り開きの斜面で滑っていた。

時代が進み昭和12～15、6年頃、山下武夫氏（鍛冶屋町）や当時銀行員であった田中弥一郎氏（故人＝田野町）等同好の人達が兵庫北部の山岳（妙権、蘇武、鉢伏等）の縦走ツアースキーもやられていたが本格的に普及しはじめたのは戦後のことである。

綾部にスキーの気運が高まったのは終戦後の物資不足と生活難に喘ぐ世相の下で何とかしてスキーをしたい、仲間と一緒に滑りたい、そんな想いを持った人達が集まり合っはじめられた。（昭和25年）中心的に活動されたのは、長岡病院の医師であった徳田氏や綾部工業高校の校長だった磯貝勇氏、四方八郎氏（故＝里町）、公立学校の校長、山下由松氏（鍛冶屋町）、グンゼKKに勤務されていた小山一郎氏（兵庫県出身）であった。

### 2. 発展の経過

#### ①組織化と活動の現状

スキー協会として組織をつくり親睦を深め技術の向上をめざす活動をはじめたのは







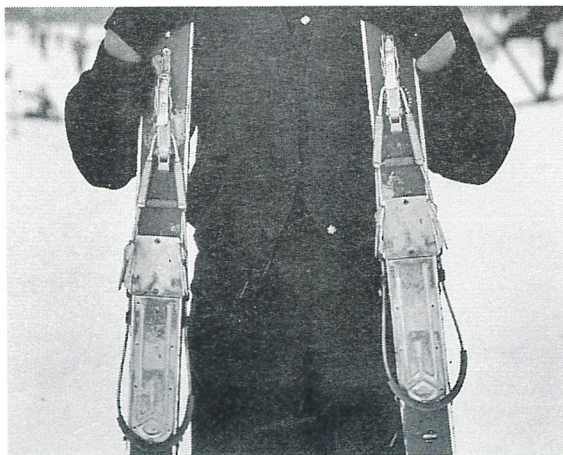
山道を足元に気遣いながらの徒歩行で現地入りしたこともあった。

当時はスキー場の開発も少なく、リフトの施設も不十分でスキーの板を肩に喘ぎながらの登行、体力の消耗に滑る時間や距離も限られる状態であった。

## ②用具の状況

又用具も木製の板でエッジ無し、締具も踵の上がるフィットフェルト式やカンダハール、ストックは篠竹かトンキン竹、靴はゴム靴、手袋は軍手か毛糸編み、服装も今様でいえばトレーニングウェア程度の粗末なもので寒さを凌ぐのが大変であった。天候の状況によっては当時協会指定の山小屋(食堂)で濡れた衣服を乾かしながら天候の回復を待ったことも屢々であった。

そんな状況も時代の進展のもとスキー用具や衣服も格段に性能や質が改良された。中でも

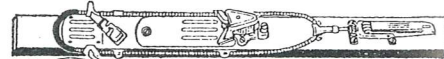


### セーフティ・バイディング



チロリア製

はきやすいので、初心者、女性向き。左右のほか前方からのショックではずれる。



マーカ型

マーカ型の金具にワイヤーを使用したものではきやすい。初心者向き。左右のほか前方からのショックではずれる。



マーカ型

うしろを金具でしめてから革ひもでしめる。中・上級者向き。前後のショックではずれない。

スキー板は樹脂製が中心となり、滑り性能を高めた製品がスキーヤーの人気の的となった。

用具の改良改善によって、技術が高まっていく要因になったことはいうまでもないことである。

## ③スキー技術の変遷

戦後より昭和30年代の前半、フランスの技術(リュアード、ロタシオンの技術=上体先行の振りこみ)が主流であったが、それも戦後の主だった競技会においてフランス勢が圧勝していたからであった。

こうした中、昭和33年オーストリよりルディ=マツ氏が来日され伊吹スキー場でオーストリーの技術(バインシュピール=外傾外向の逆ひねり)を紹介され、続いて昭和38年クルッ

ケンハウザー教授の来日によって日本のスキー界のメソッドが確立されていく契機となった。綾部のスキーもこうした時流の中で技術の向上を目指して活動を展開していった。

## ④地元でスキー場を求めて

協会の活動をめぐって近在の山地にて気軽にスキーのできる所がないのか、という点で比較的雪深い上林の山地(鳥垣地内)に広がるスロープに目をつけて話しあい、一度登ってみてはどうかという事から調査隊をつくって調査に乗り出した。昭和32年頃の事であった。一行(11名)が入った山は標高も比較的高く雪量も多くシーズン中は不足はないが、スロープに比して裾野が短くその上登行のアプローチが急坂なことから、多額の開発費をかけてまでスキー場にするまでもないということで踏査だけに終わった。他にも古和木の頭布山や古屋地区の洞峠等の名が挙がっていたが話だけに終わった。

## ⑤底辺の拡大をめざして

目標としていたスキー人口の拡大のためにスキー講習会を企画、バスの運行による実施を図ったが、宣伝の不十分さと運営にかかる諸問題(参加人員の確保やバス料金問題)や貸スキーの入手、ゼッケンの作製費、クラス別の編成にかかる指導者の確保等多くの困難点があった。その上時には大雪で運行不能となり止むなく中止したり、又帰路積雪多量のために除雪が不十分で狭隘な道路事情と相まって大渋滞、5~6Kの道のりでありながら5時間も6時





間もかかり帰綾が夜明け近くになったこともあって苦労も多くあった。

しかし参加者の反応は概して良好で期待する声もあって年次を重ね今日の事業の土台となった。

#### ⑥京都府スキー連盟に加盟

昭和38年冬、近隣クラブの推薦を受けて府連に加盟し上部団体とつながりを持って活動を展開していく事になり、府連主催による競技会、団体予選会、講演会、技術講習会、資格検定会、等への参加を含め多方面にわたって行動することになった。人が動けばそれに付随して出費も多くなり経費の捻出に苦労が伴ったが、そうした努力が府連のクラブ対抗の競技会で入賞者（2位、3位）が出たり、1級特研や指導員検定への参加も増加するというように、協会としての力量を高めていく上に大きな力となった事はいうべきもない。

### 3. 組織体制の強化（クラブ制の導入）

府連に加入した関係から、組織としての活動の分野が多岐に亘り、現行の組織のままでは運営が出来にくい状況となってきた事から事務局の仕事の軽減を図り、各事業を責任をもって任務の遂行に当たっていく体制を早急につくる必要が生じた。そのため個人加入の形から職場や地域、同好の志などでまとまってクラブを結成して協会に加入する形式をとることになった。そしてクラブ毎に任務を分担（事業の割振り）し遂行していく新しい体制で臨むことになった。またクラブ単位の加入金と分担金（人数でもって計上）の制度を採用し予算の充実を図った事は、諸事業遂行の上で経費を合理的に運用ができるようになり、プロジェクト隊の活動も充実したスタッフのもとに展開されて円滑に事業を運営できるようになった。

〈クラブ構成の状況〉

○四峰スキークラブ（19名）	会長 木下 實
○ホワイトライナーズスキークラブ（28名）	会長 四方 軍治
○トマトスキークラブ（19名）	会長 村上 享
○田子作スキークラブ（29名）	会長 久木 康弘
○日東スキークラブ（50名）	会長 平岡 玄吉
○綾部信用金庫スキークラブ（24名）	会長 荻野 昭
○綾部市役所スキー同好会（25名）	会長 丸岡 章作
○綾部教職員スキークラブ（34名）	会長 岩上 保
○スノーフレンドスキークラブ（10名）	会長 永井 秋夫

以上9クラブ238名の会員でもって協会の諸活動を推進してきた。

### 4. 活動の活性化と技術の向上

#### ①四都市冬季大会

冬季の大会が正式の競技種目として採り上げられた昭和40年1月（第13回大会）、ゲンゼスキー場にて実施された。（それまで数年間試行錯誤的にオープン競技として実施していた）大会に参加はしたものの制限された



コースを1秒でも早くゴールすることを要求される競技だけに、単に滑る力だけでなくコース上に立つポールをクリアする技術が優劣を分けた点で綾部の選手の成果は今一つであった。この事から選手帯同による練習会を企画し、コースを設定しポールを立てたトレーニングも実施しながら選手の力量を高める努力を重ねた。そうした甲斐もあって昭和41年の大会（ゲンゼ会場）において壮年の部で金田忍氏が優勝し、次いで昭和43年（大江山）の大会「女子の部」で今技昭子さんが優勝した。青年の部で圧勝していた宮津や遅れをとっていた福知山の強豪を抑え昭和46年に大久保泰宏氏が優勝し綾部として進境著しいものがあった。その後しばらく振るわなかったが、昭和60年（大江山）の大会に再び青年の部で出口則明氏が優勝の栄冠を手にした。次いで平成3年（大江山茶屋ヶ成コース）の大会では壮年一部において山田修司氏が優勝、最近では平成11年（大江山）の大会で立藤聡氏が青年の部で優勝を果たしている。以上徐々にではあるが選手個々の努力によって力量を高めるまでになってきている点で今後の活躍に期待するところが大きい。

### 5. 活動の変遷と課題

昭和30年代の後半の好景気の世相のもとスキー場の整備、拡充が進み用具の改良改善と相まってスキー人口の増加の傾向が進む中、特に土、日の休日はスキー場の混雑度が高まり、昭和50年代後半になると、これまで認められていた競技コースの使用もスキー場の経営上の都合から制限されはじめた。そして平成時代に入るといまままで実施してきた四都市大会の出場選手の強化練習会や市民スキー大会、クラブ対抗競技会の実施のために許可されていたコースの使用が認められなくなった（平成9年）。強いて利用したい場合、高額な利用料を支弁する事で特別に許可される手段もあったがそれも叶わず数十年来の継続してきた事業も中



止し、一部見直しを余儀なくされた。

せっかく協会内の指導者の体制も整い、協会独自で能力検定会（バッヂテスト）も実施してきた矢先の事でもあり残念なことでもあるが、これも時代の流れである以上止むを得ないと断念している。

他方、限られた短いシーズンのもと最近の暖冬傾向で降雪積も年々少なくなってきており、スキースキーの出来る機会も限られてきている中一日でも多く滑走したいという思いの若い人達は、組織活動に束縛される事に消極的になり次第に組織離れの現象が生起してきている。当初9クラブであったが、現在では4クラブに減少しており組織として活動していく上で事業の推進上の課題（役割の負荷や経費の充当など）に直面している。又その上最近のスキースキー人口がスノーボードの台頭により若年層がスキーよりスノーボードへと志向が高まってきていることも組織離れの一因となっている。

こうした点を踏まえて、スキー協会としてはスノーボードも含めた組織化の検討もしなければならぬ時期に直面している。

技術にしても最近カービングのスキー板が主流となってきている状況もあり従来の滑りの技術も大きな変化の過程にあつて、新しい技術を習得することや、スノーボードの技術を指導できる有資格者の養成にも取り組んでいかねばならない課題といえる。

このような状況下で平成3年からジュニア部親の会を組織し、会員数40～50名を擁し毎年シーズン中4～5回の練習会を実施しシーズンの終わりには積雪の多い信州や、鳥取若桜のスキースキー場に遠征してシーズンの総括（級別検定会の実施）をしその成果を挙げているが、年々指導に当たる人材の確保が難しくなっている事もある苦慮している。

又、ここ4～5年志賀高原スキースキー教室（本年で19回を実施している）にシニアの方々の参加を呼びかけ、最高年齢「83才」の方の参加もある中で「生涯スポーツ」の在り方を模索し



ているが、ジュニアの活動と同様にレッスン体制（指導者の確保）を維持していく事で指導者のボランティア精神の高揚に俟つところが多く簡単に片付く問題ではない。

以上のような様々な課題を持つ協会ではあるが幸い有能な若手層が有資格者として成長し活動している現今その力を結集し、



弱体化してきている組織の立て直しと若返りを図ることを通して、21世紀の新しい時代の方角づけと活動の方策を明らかにして進んでいく事を念願し、ここに50年の歩みのまとめをしたい。



# 歴代会長



初代会長  
故 徳田 医師  
(中ノ町)



二代会長  
故 磯貝 勇  
(上野町)



三代会長  
故 四方 八郎  
(里町)



五代会長  
吉野 雄策  
(並松町)



六代会長  
故 今枝 俊次  
(並松町)



七代会長  
木下 實  
(神宮寺町)

# 表彰

## 府スポーツ功労賞

S60 今枝 俊次

## 府体育協会功労賞

H9 森山 頼夫

## 綾部体育協会功労賞

S63 木下 實

〃 森山 頼夫

H4 山下 信幸

H7 久木 康弘

H9 荻野 昭

## 綾部スキー協会功労賞

S60 木下 實

〃 上原 幸一

〃 森山 頼夫

〃 岩上 保

〃 荻野 昭

H12 永井 秋夫

〃 山下 信幸

〃 塩見 良治

〃 久木 康弘

〃 仲久保 政司

〃 本郷 実司

〃 上原 季司

## 四都市特別功労賞

H9 木下 實

〃 森山 頼夫

## 四都市功労賞

S52 今枝 俊次

S57 森山 頼夫

S62 木下 實

## 四都市30年連続表彰

H4 木下 實

H12 上原 幸一

〃 荻野 昭

## 四都市20年連続表彰

S62 岩上 保

S63 大槻 治郎

〃 四方 之博

H4 山下 信幸

〃 永井 秋夫

〃 四方 昌光

H12 塩見 良治

## 四都市10年連続表彰

S52 大槻 章作

〃 丸岡 頼夫

〃 森山 頼夫

S53 若山 正行

S57 久田 理一郎

〃 湊 敏

S62 中塚 正樹

H3 四方 軍治

〃 久木 康弘

H4 坂本 全

〃 小寺 哲朗

〃 山田 修司

〃 温井 直美

〃 村上 範行

H6 亀井 早百合

H8 出口 則明

H10 本郷 実司

H11 上原 季司

〃 大槻 麻美

〃 仲久保 政司

H12 玉井 ひとみ

〃 雨林 利治

## 四都市冬季大会競技関係表彰

S41 壮年の部 優勝 金田 忍 (ゲンゼ)

S43 女子の部 〃 今枝 昭子 (大江山)

S46 青年の部 〃 大久保 泰宏 (ゲンゼ)

S60 〃 〃 出口 則明 (大江山)

H3 壮年の部 〃 山田 修司 (大江山)

H11 青年の部 〃 立藤 聡 (大江山)

H6 距離競技 〃 橋本 幸代 女子

(大江山) 立藤 聡 青年

仲久保 政司 壮年 (1)

永井 隆 壮年 (2)



# 年 表

年次	月	主 な 行 事	年次	月	主 な 行 事
昭25	12	・有志によってクラブの話し合い (徳田医師を中心に7~8名) ・夜久野スキー場にて滑走 ・有志(クラブ員)によるスキー行(神鍋山) ・磯貝勇氏クラブ会長として就任 ・神鍋スキー場(三本松)にて滑走	昭33		施(神鍋山スキー場) ・途中積雪多量のため夜久野峠で下車(夜久野スキー場にて滑走)
昭28		・夜久野、神鍋スキー場にてクラブ員の親睦を深める ・四方八郎氏クラブ会長となる	昭35	2	・大江山スキー場にて四都市スキー大会(オープン競技=回転) ・京都府連スキーバッチテストの実施(綾部より3名参加内1級合格1名)
昭29		・夜久野、神鍋スキー場にてクラブ員の親睦を深める ・四方八郎氏クラブ会長となる	昭36	1	・今枝拓三郎氏会長として就任 ・大江山スキー場にて四都市冬季大会(オープン)への参加のため選手の合同練習の実施 ・スキーバスツアー
昭31	2	・大江山スキー場(成相山)において府連スキー検定の実施(綾部より2人参加) ・夜久野スキー場にてクラブ員の親睦交流を深める ・山下芳松氏クラブ会長として就任 ・大江山スキー場 ・夜久野スキー場 ・神鍋スキー場 にてクラブ員の交流(延人員70名程度)	昭36	2	・神鍋山スキー場へ(参加者50名程度)
昭32	1	・大江山、夜久野スキー場にてクラブの親睦をはかる ・神鍋スキー場行	昭37	1	・四都市スキー大会(オープン)競技への参加のため選手練習会
	3	・鉢伏山、氷の山スキーツアー	昭37	2	・協会員の個人別練習計画によるトレーニング
	4	・立山スキーツアー	昭37	3	・伊吹山ツアー(4名参加)
	12	・奥上林(鳥垣)スキー場予定地視察 ・吉野雄策氏会長として就任	昭37	4	・氷の山ツアー(3名参加) ・大江山スキーツアー(2名参加)
昭33	1	・バスにてスキーツアーの計画実	昭38	1	・府スキー連盟へ加入 協会の活性化をはかる ・スキー講習会(ゲンゼ)
			昭38	2	・四都市冬季大会(ゲンゼ) 4位(オープン競技)
			昭39	2	・四都市冬季大会(オープン=大江山) 雪不足のため中止
			昭39	3	・鉢伏高原スキーツアー

年次	月	主 な 行 事	年次	月	主 な 行 事
昭39	8	・スキー教室と夏山映画の夕べ	昭44	3	・鉢伏高原スキーツアー
昭40	1	・スキー講習会(ゲンゼ)		12	・スキー映画会
	2	・四都市冬季大会=四都市大会第13回大会より採点種目として実施(ゲンゼ) ・スキー講習会(鉢伏)	昭45	1	・市民スキー大会(ゲンゼ)
	3	・鉢伏高原スキーツアー		2	・四都市冬季大会強化練習(万場) ・四都市冬季大会(ゲンゼ) ・府連盟クラブ対抗スキー大会(大江山)
	4	・立山スキーツアー(福知山スキー協会共催)			・スキー講習会(万場) ・府連盟バッチテスト
	8	・スキー教室と夏山映画の夕べ		3	・鉢伏高原スキーツアー ・スキー映画会
昭41	1	・四都市冬季大会選手練習会(ゲンゼ)	昭46	1	・市民スキー大会(中止) ・四都市冬季大会強化練習(万場) ・四都市冬季大会現地練習会(ゲンゼ)
	1	・四都市冬季大会(ゲンゼ)		2	・四都市冬季大会(ゲンゼ) 3位 青年の部優勝 ・スキー講習会(万場)(中止) ・府連盟クラブ対抗スキー大会
	2	・スキー練習会(ゲンゼ)		11	・スキー映画会
	3	・鉢伏高原スキーツアー	昭47		積雪不足のためすべての行事中止
	11	・スキーの夕べ映画会	昭48	1	・四都市冬季大会強化練習(万場) ・府連バッチテスト(中止)
昭42	1	・四都市冬季大会強化練習(万場) ・四都市冬季大会(ゲンゼ)		2	・四都市冬季大会(大江山)(中止) ・市民スキー大会(ゲンゼ)(中止)
	2	・スキー講習会	昭49	1	・四都市冬季大会強化練習(万場) ・四都市冬季大会現地練習会(ゲンゼ)
	3	・鉢伏高原スキーツアー		2	・四都市冬季大会大会(ゲンゼ) ・市民スキー大会(ゲンゼ)
	11	・スキー映画会		3	・鉢伏高原スキーツアー
昭43	1	・四都市冬季大会強化練習(万場)	昭49	1	・四都市冬季大会強化練習(万場) ・四都市冬季大会現地練習会(ゲンゼ)
	2	・四都市冬季大会(大江山) 3位 女子の部優勝 ・スキー講習会(神鍋)		2	・四都市冬季大会大会(ゲンゼ) ・市民スキー大会(ゲンゼ)
	3	・鉢伏高原スキーツアー		3	・鉢伏高原スキーツアー
	12	・スキー映画会 ・四都市代表選考会	昭50	1	・四都市冬季大会強化練習(万場)
昭44	1	・四都市冬季大会強化練習(万場) ・四都市冬季大会現地練習会(大江山)			
	2	・四都市冬季大会(大江山) ・スキー講習会(万場) ・第1回市民スキー大会(ゲンゼ)			



年次	月	主な行事	年次	月	主な行事
昭50	2	・四都市冬季大会(ゲンゼ) ・市民スキー大会(ゲンゼ) ・府連盟クラブ対抗スキー大会(奥神鍋)	昭55	1	・四都市冬季大会合宿練習会(万場) ・国体京都府予選(大山)
	3	・鉢伏高原スキーツアー		2	・四都市冬季大会(大江山) ・市民スキー大会(万場)
昭51	1	・四都市冬季大会強化練習会(万場) ・四都市冬季大会現地練習会(大江山)	昭56	11	・スキー講習会(市民センター)
	2	・四都市冬季大会(大江山) ・市民スキー大会(ゲンゼ) ・府連盟クラブ対抗スキー大会(東鉢伏)		1	・第1回志賀高原スキーツアー ・四都市冬季大会合宿練習会 ・少年野球チームスキー講習会(山の宮)
	3	・鉢伏高原スキーツアー		2	・四都市冬季大会(大江山) ・西日本スキー大会(大山) ・市民スキー教室(山の宮)
昭52	1	・四都市冬季大会合宿 ・団体京都府予選(大山) ・四都市冬季大会(大江山)	昭57	3	・市民スキー大会(万場) ・市クラブ対抗スキー大会 ・スキー教室(市民センター)
	2	・府連盟クラブ対抗スキー大会(東鉢伏) ・市民スキー大会(万場)		1	・四都市冬季大会合宿練習会(万場) ・四都市冬季大会 ・府連盟クラブ対抗スキー大会(奥神鍋)
	3	・スキー協会の集い		2	・四都市冬季大会 ・府連盟クラブ対抗スキー大会
昭53	1	・四都市冬季大会合宿練習会	昭58	3	・市民スキー大会(山の宮)
	2	・四都市冬季大会(ゲンゼ) 女子の部優勝 ・府連盟クラブ対抗スキー大会(東鉢伏)		11	・秋季トレーニング(ゲンゼ)
	3	・市民スキー講習会		12	・スキー教室(商工センター)
昭54	1	・四都市冬季大会合宿練習会	昭59	1	・志賀高原スキーツアー ・四都市冬季大会合宿練習会
	2	・四都市冬季大会(ゲンゼ) ・府連盟クラブ対抗スキー大会(東鉢伏) ・市民スキー大会(万場)		2	・四都市冬季大会(大江山) ・府連盟クラブ対抗スキー大会(奥神鍋) ・基礎スキー講習会 ・市クラブ対抗スキー大会 ・市民スキー大会(大江山)
	11	・たのしいスキー教室と映画会(市民センター)		12	・市民スキー講座

年次	月	主な行事	年次	月	主な行事	
昭58	11	・秋季トレーニング(比叡山)	昭61	3	・市民スキー大会(万場)	
	12	・市民スキー教室(商工センター)		4	・春季トレーニング(グラススキー試乗会)	
昭59	1	・志賀高原スキーツアー ・四都市冬季大会合宿練習会 ・市民スキー講習会(中止)	昭62	6	・市クラブ親睦ソフトボール大会	
	2	・四都市冬季大会(大江山) ・府連盟クラブ対抗スキー大会(奥神鍋) ・基礎スキー講習会 ・市クラブ対抗スキー大会 ・市民スキー大会(大江山)		9	・秋季トレーニング	
昭60	1	・志賀高原スキーツアー ・四都市冬季大会合宿練習会	昭63	12	・市民スキー教室(西部舞鶴農場)	
	2	・四都市冬季大会(大江山) 3位 ・市民スキー講習会 ・府連クラブ対抗スキー大会(奥神鍋)		1	・志賀高原スキーツアー ・市民ポルトトレーニング(大江山) 四都市冬季大会強化合宿 ・四都市冬季大会(名色)(中止)	
	3	・市民スキー大会(万場) ・市クラブ対抗スキー大会(奥神鍋)		2	・市民スキー大会、講習会(山の宮) ・府連クラブ対抗スキー大会(奥神鍋) ・市クラブ対抗スキー大会(万場)	
昭61	4	・協会設立35周年記念式典	平1	4	・市体育協会が財団法人化、当協会も傘下に	
	6	・市クラブ親睦ソフトボール大会		昭63	1	・志賀高原スキー教室(45名参加)
	9	・秋季トレーニング			2	・四都市冬季大会強化合宿 ・四都市冬季大会(中止) ・白馬乗鞍スキーツアー
	11	・7代会長に木下實氏就任		平2	1	・志賀高原スキー教室(45名) ・四都市冬季大会強化合宿
	12	・グラススキー教室(舞鶴)			2	・四都市冬季大会(中止) ・ジュニアスキー練習会(大屋スキー場) ・クラブ対抗スキー大会(万場スキー場)
	昭61	1			・志賀高原スキーツアー ・市民スキー講習会(万場) ・市民ポルトトレーニング(万場) ・四都市冬季大会強化合宿(名色)	平1
2		・四都市冬季大会(名色) ・府連盟クラブ対抗スキー大会(奥神鍋) ・市クラブ対抗スキー大会(万場)	2		・四都市冬季大会(中止) ・ジュニアスキー練習会(山の宮スキー場) ・クラブ対抗スキー大会(万場スキー場) ・白馬コルチナススキー教室(42名)	
			平2	1	・志賀高原スキー教室(46名)	



年次	月	主な行事	年次	月	主な行事
平2	2	・四都市冬季大会強化練習 ・四都市冬季大会(総合3位) ・白馬コルチナスキー教室(42名) ・ジュニアスキー練習会 (山の宮スキー場) ・クラブ対抗スキー大会 (万場スキー場)	平6	2	・志賀高原スキー教室(45名) ・四都市冬季大会強化練習 ・四都市冬季大会(総合2位) ・コルチナスキー教室(47名) ・クラブ対抗スキー大会 (万場スキー場)
平3	1	・志賀高原スキー教室(43名) ・四都市冬季大会強化練習	平6	3	・ジュニア合宿スキー練習会(志賀高原横手スキー場 47名 引率保護者・指導者等)
	2	・四都市冬季大会(総合3位) ・ジュニアスキー練習会 (山の宮スキー場) ・クラブ対抗スキー大会 (万場スキー場) ・コルチナスキー教室(45名)	平7	1	・志賀高原スキー教室(協会設立45周年記念事業として特別企画86名参加) ・四都市冬季大会強化練習
平4	1	・市民スキー大会(第20回 61名) (万場) ・志賀高原スキー教室(46名) ・四都市冬季大会強化練習	平7	2	・四都市冬季大会(中止 阪神大震災) ・第23回市民スキー大会(74名) ・クラブ対抗スキー大会 (万場スキー場) ・コルチナスキー教室(36名)
	2	・四都市冬季大会(中止) ・コルチナスキー教室(45名) ・クラブ対抗スキー大会	平7	3	・ジュニアスキー練習会(1泊練習会 奥ハチ 37名) ・ジュニア合宿スキー練習会(3泊4日コルチナ 45名)
平5	1	・市民スキー大会(第21回 51名) (万場スキー場) ・志賀高原スキー教室(48名) ・四都市冬季大会強化練習	平8	1	・ジュニアスキー練習会 (奥ハチ 35名) ・志賀高原スキー教室(スキー教室15周年記念 48名) ・四都市冬季大会強化練習
	2	・四都市冬季大会(中止) ・コルチナスキー教室(46名) ・クラブ対抗スキー大会 (万場スキー場)	平8	2	・四都市冬季大会(総合3位) ・コルチナスキー教室(40名) ・第24回市民スキー大会(78名) ・クラブ対抗スキー大会
	3	・ジュニア合宿スキー練習会(熊の湯41名 参加者バス1台満席)	平8	3	・協会主催スキー技能テストの実施(1級6名、2級9名合格)
平6	1	・市民スキー大会(第22回 48名) (万場スキー場)			

年次	月	主な行事	年次	月	主な行事
平9	1	・ジュニア宿泊練習会(オジロスキー場 参加者32名) ・ジュニアスキー練習会(氷ノ山国際 参加者32名) ・四都市冬季大会強化練習 ・第25回市民スキー大会(中止) ・四都市冬季大会(中止 日本海重油流出事故のため) ・志賀高原スキー教室(38名) ・基礎スキー技能テスト(奥神鍋1級5人、2級9人合格) ・コルチナスキー教室(21名) ・ジュニア練習会(コルチナ 35名)	平12	1	・ジュニア練習会(オジロ) ・志賀高原スキー教室 ・ジュニア練習会(オジロ) ・四都市冬季大会強化練習(氷ノ山) ・四都市冬季大会(中止) ・ジュニア練習会(オジロ) ・ジュニア練習会・基礎スキー技能テスト(オジロ) ・ジュニア合宿練習会(若桜氷ノ山)
	2		平12	2	
	3		平12	3	
平10	1	・ジュニア宿泊練習会(オジロ) ・ジュニア部練習会(オジロ) ・志賀高原スキー教室(33名) ・四都市冬季大会強化練習(氷ノ山) ・四都市冬季大会(中止) ・基礎スキー2級検定講習会(オジロ) ・ジュニア練習会(オジロ) ・ジュニア練習会(オジロ) ・基礎スキー技能テスト講習(氷ノ山 11名) ・ジュニア合宿練習会(コルチナ)	平11	1	・ジュニア宿泊練習会(オジロ) ・志賀高原スキー教室 ・ジュニア練習会(オジロ) ・四都市冬季大会(総合2位) ・ジュニア練習会(オジロ) ・ジュニア練習会(オジロ) ・ジュニア合宿練習会(若桜氷ノ山)
	2		平11	2	
	3		平11	3	



## 各部のとりくみ

### クラブ対抗競技会

昭和56年に組織の活性化をめざしたクラブ制の導入（ホワイトライナーより提唱）によって、翌年よりクラブ対抗スキー競技会を開催する事になった。

競技会の目的に「クラブ間の親睦を深め、競技を通じて技術の向上を図る」事を唱い設定した。

クラブとして登録した9団体の傘下の選手達によって、毎年スキーシーズンの大会に万場高原を会場として実施してきた。当初は協会内の役員の手によって、ポールセットから記録の計時（ストップウォッチによる）も手動で計測する、というように運営面で出場選手の十分な満足感を得るには不都合な点もあったが、それぞれの選手はクラブを代表しての競技会という事で意気の高揚のもと熱戦を展開した。当初は、充実したクラブとして活動していたホワイトライナースキークラブが優勝する事が多く、次いで日東スキークラブが競技会への出場を契機に部員の熱も高まり、大学のスキー部で活動していた有力な選手も加わってのトレーニング（宿泊を伴う）を実施したりして着実に力をつけ、昭和58年の競技会には優勝す



るまでになった。

他に四峰やトマトのクラブも有力な選手を擁し、白熱した競技会を毎シーズンに亘って展開してきた。

運営面で特に計時の正確さを期する事が選手の期待に応え、競技会としての信頼度を高めるポイントである、という事から万場高原スキー場の会場使用と関わってコースのセットから計時の測定までパトロール隊に依頼し、光電管による計時の採用により競技会の実施に踏み切った。

このような推移の中で次第に有力な人材を擁する田子作クラブ、スノーラビット（市役所内）が優勝を手にするまでになってきた最中（平成9年の冬）、雪上スポーツの人気もあってスキー人口の増加によるスキー場は日曜日ともなるとリフト待ちは長蛇の列、ひどい時は2、30分も待ってやっとリフトに乗れる、というような混雑状態の中、万場スキー場の経営方針のもと（人手不足と経費の問題）、競技会への協力に難色を示された。協会としての接渉も功を奏さず十数年継続してきたクラブ対抗スキー競技会も平成9年の大会（雪不足もあって中止）を最後に幕を下ろした。

折からの不景気もあって、職場を中心にしてクラブを組織していた日東スキークラブは解散し、又同好の志で組織していたホワイトライナーやスノーフレンド、トマトの各クラブも部員の減少や運営上の面で活動に支障を来し、休部や解散する中で、現在4クラブとなった現状にあるのも淋しい限りである。

#### 〈クラブの現状〉 H12.11現在

◎クラブ数 4 ◎会員数 70

- スノーラビット (29) 会長 四方 之博
- 四峰スキークラブ (17) 会長 木下 實
- 田子作スキークラブ (17) 会長 本郷 実
- 信用金庫スキークラブ (7) 会長 荻野 昭



## 市民スキー大会

昭和44年より、ウインタースポーツとして参加を通して市民の関心を高め、スキーの楽しさを体感して頂きながら体力の維持の一助として開催してきた。勿論主催は財団法人綾部市体育協会であり、スキー協会が主管するという形式であり、綾部市教育委員会が後援の市挙げての大会である。

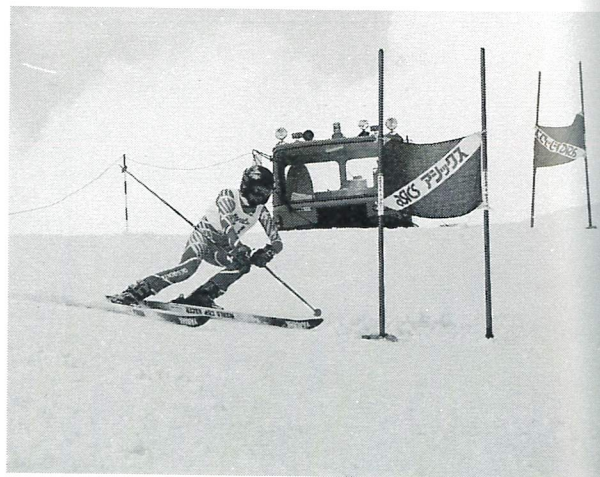
種目としては大回転競技ワントライル（初心の方でも滑れるように緩斜面のコースにポールをセットした）によって計測する大会であり市民が気軽に参加できる体制をとっての運営をした。

部門別には、小学生、中学生の男子の部、小学生、中学生女子の部、一般男子B級、一般女子B級、一般男子A級、一般女子A級の五部門とした。特に競技経験のある四都市冬季大会等に出場した者は男女共A級に位置づけして、市民の参加しやすいように配慮をした点もこの大会の特色といえる。

このようにして運営してきた大会も当初は会場も大江山、神鍋山の宮、神鍋大机山、万場と積雪やスキー場の状況によって実施してきたが、折からの暖冬傾向もあって降雪積の多少から大会も計画しては中止という年度もあって、折角の市民各位の期待に応えられず大変残念な事であった。

その上に平成に入ってよりクラブ対抗と同時開催（午前中クラブ対抗、午後市民スキー大会）する事による光電管計測も採り入れて運営をしており好評を受けていたが、平成9年スキー場経営の都合上大会の実施不能の事態が生じた。永年市民レベルの大会として親しまれ、出場者の中にはボーゲン程度のスキーの技術の方や若い頃のスキーを思い出して競技に参加され楽しめる姿に、大会を運営する関係者も心の和む場面も多々あって何としても心残りのする事象である。

幸い、最近ジュニアの成長や志賀高原のスキー教室にて技術の講習会を実施している事や、京都府スキー連盟の主催によるクラブ対抗スキー競技会、各種の競技会等に参加する方もあり、協会としても大いに力強さを感じると共にこうした動きに期待をかけている。



## 四都市冬季大会

四都市大会は本年で第48回目を迎えるが冬季の競技は第13回（昭和40年）大会より正式の採点種目として位置づけられ、夜久野町のゲンゼスキー場を会場に開催され綾部から青年の部10名壮年の部9名が参加した。

正式の種目としてスキー競技が採用されるまでは、昭和32年よりオープン競技として滑降競技と回転競技の2種目を設定し、それぞれの都市から参加した選手がスキー競技を通して技術を競い合い親睦を深めた。オープン競技とはいえ各都市より選抜されてきた選手だけに技術も達者な者が多かった。その中で20名余の参加した綾部勢は滑降の部ではそこそこ健闘したが、回転競技は宮津や福知山の選手の技術の高さに圧倒された。数年間のオープン競技が続けられ、シーズンになるとスキーの技術を高めるために各地のスキー場（遠くは信州方面まで）に遠征しての技術練成に努める中で第13回の大会に参加したのである。しかし結果は福知山市が優勝し、わが綾部市は選手の健闘も報われず4位となった。13回の大会以来34回大会までの間、会場としてゲンゼスキー場の開催が10回、大江山スキー場開催が7回、名色スキー場が1回となっている。

この間積雪不十分で中止となる事も多く6回も中止になった。折から暖冬傾向にあって積雪も少なく、大会間際になっての中止はせっかく高まってきている選手の氣勢を削ぐことになり兼ねないし、また度々中止になることが今後も予想される状況下では、選手のやる気と関わって大会への参加体制作りが関係者の間でいろいろ検討された。その結果、四市合意の中で積雪の多少を心配しなくてもよい場所を会場にしてでも毎年確実に大会を開催できるようにしようという事で、当面神鍋方面に決めて実施することになった。福知山市の当番の年

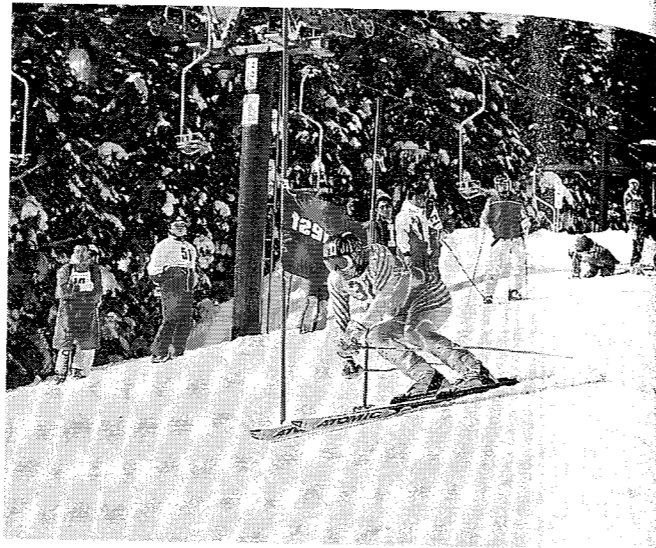
（第34回大会＝昭和61年）名色スキー場で実施した。大会は遠方まで足を運ぶことで心配もされていたが、運営も支障なく運び成功裡に終わった。

その後昭和62年第35回大会の当番を受ける綾部市も名色スキー場での開催に向けて、関係者に礼を尽くし次回大会に備えた。年も押し迫った61年の暮れ、名色スキー場よ





り四都市大会の会場使用の断わりを受けた。綾部市としては予期せぬ事として名色スキー場の代表者と度々交渉したが不調に終わり、開催をめぐって心当たりのスキー場に手を廻したが結局大会委員会の結論として遠方のスキー場での開催は運営万端上困難である。(役員の派遣や経費の負担増)という点で、以後地元のスキー場(大江山、ゲンゼ)の積雪のあるなしに関係



なしに開催するという事に決定されて、今日までの経過を辿ってきたのである。昭和62年以降の13年間で大会が実施されたのは5回のみで、後の8回は何等かの理由で中止になっている。その主な要因は近年の地球温暖化による積雪不足と、その他に神戸大震災や日本海の重油流出事故等による社会的な要因で中止の止むなきに至っている。大会に備えて練習に打ち込む選手達には大変に気の毒な一面が見受けられる。

当市の四都市冬季大会の成績は、総合3位、4位が定位置であったが、近年選手層の飛躍的な技術向上の中で平成6年度と平成11年度に総合2位までに躍進する快挙を達成している。この成果は近年若い力の台頭による競技スキーへの関心から、京都府連クラブ対抗、京都府国体予選、インターハイ出場等上級レベルの大会へ出場する選手が増加した。スキー協会のジュニア育成の効果に負うところも大きいと思う。中学、高校、大学と競技スキーに取り組み京都府代表になっている選手を輩出するまでになった。これらの選手が郷里にユーターンして代表選手になってくれる日を楽しみにしている。大会の運営上に欠くことの出来ない光電管計時についても、費用面を少しでも安価に求めながら関係筋より調達して正確なタイム測定に取り組んでいる当市の役割は大きいと思う。

平成に入り距離競技がオープン競技から公式種目に採用され、四都市冬季大会を一層盛り上げているのも大変嬉しい限りである。この種目は当市の得意種目で、常に優勝を始め上位入賞を果たしている。近年若者のスノーボード人気の高まりでスキー人口の減少が懸念される中、四都市冬季大会を通じての四市の交流とスキーへの関心を高めることは、スキー関係者にとって大きな課題と思われる。

## 四都市冬季大会(47回)のホストを終えて

例年、四都市体育大会の初頭を飾る冬季大会は、準備をしては雪不足の為に中止となり、その意義を問う声もある中で迎えた今年の大会であったが幸いにして前夜来よりの降雪もあり、絶好の日和に恵まれて前日の準備もスムーズに運び、当番市としてホストの役割を滞りなく果たし終えた事は何よりであった。

大会を終わって当番市として事に当たった経緯を振り返りながら、その責務をまとめ次回への参考に資したい。

今年の大会で特に重視したのは、競技の鍵を握る計測方法であった。去年の46回大会(福知山市が当番)の実施をめぐって検討をしたが、従来活用してきた光電管による計測は経費の面で負担が大き過ぎて用意ができないという事で、ストップウォッチで計測をするという事になった。結果は雪不足で又もや中止となったが、もともとスキー競技はスピードを競い、百分の一秒がその優劣を分ける点で手動の計測(3人の計測の中間をタイムに採る)では、選手個々の滑走タイムを正確に測れる筈がないし不公平そのもので信頼性に欠けるのは自明の理である、が、しかし「四都市の親睦を旨とする大会だからお互い理解しあって時計でやっても許される…」という関係者の意向もあつての事であった。

私は内心時計でやる事には賛成でき兼ねる考えもあり、当番市としては「計測については選手個々の絶対信頼のもとに行われるべきで、その信頼性が親睦の基本である」という思いから昨年来より縁故を頼って探し求め、やっとの思いで光電管の活用できる道を開いた。

昨年問題になった経費や使用する期間については、機械操作上リハーサルの間も必要の中での借用依頼に対しても持ち主の方は、「同じ道を歩んでいる者として、お役に立つのでしたらどうぞお使い下さい。大会の成功を祈ります。」と気軽に応じて頂き、経費もお礼程度で了承を受けた。

何せ私をはじめ大会運営に当たる役員は、光電管を操作する事は初めての事であり、その要領について再三に亘って持ち主宅まで足を運んでの指導(器械の操作、線、バーの設置、光電器(ゴールセンサー)のセットの仕方、スタートからゴールまでの距離=約1000米の間の通電方法、スタートバーの蹴り出し発信音の聞き分け、等々)を受けて1週間前には大江山スキー場でのリハーサルをやり、準備万端を整えて大会に臨んだ。

又、前日より入山した事務局担当役員や競技役員は、綿密な打ち合せの上それぞれの部署にて担当の任務の遂行に当たった。

久し振り(8年の空白)のホストであり、全く経験のない者も役員として加わっていた事もあって、一からの勉強の中で事を運ばねばならず、ホストとしての重責から担当のストレ



スがかかり競技委員長の心労、気配りも大抵ではなかった。

コースセッターは、地形や斜度の緩急、積雪の状況等を考慮に入れてのセッティング、特にセットに入るまで一般にコースが開放されていた為にメインとなる斜面の雪が削られて地肌が出る状態になり、当初のセットの構想外のコース取りをしなければならず、旗門間の距離の関係や左右に振ったコースのリズムをくずさないよう何度もボールの立て直しをするといった苦心を払い、最終的に関門数を23旗門としてセットを終了した。(因に大回転コースは滑走距離に対し旗門数の割合が決まっている=競技規則)

コース係は、セットされたコース(青と赤のボールが交互に立つ)の状況に応じ、選手のスキー操作によって削られたり掘られたりして荒れることが予想される箇所は雪面を固め、氷状にする方法(碓安の散布)でもって凍結させコースの万全を期した。大会当日はコース係長の気配りとコース係の協力により120人の選手の滑走を支え、1件の事故もなかった事をお互いに喜び合った。

又コース係は、別会場に設営すべく距離競技のコース作りに移動し、1000メートルの距離に誘導旗を立てる等の作業で相当の疲労を伴ったが、係長以下7名の係員は大会成功を合言葉に協力して事を進めた。

旗門係は、競技の開始時間(午前10時発走)までに23双のボールに赤、青の旗(インとアウトの印を染め抜いたもの)を結びつけ、ボールの基に目印の赤青のインクを落とし競技者によって倒されたボールを即座に基の位置にもどせるよう配慮、そして出発地点から順にボールに番号札をつけて作業を終了。

競技中は旗門係長以下16名はそれぞれ番号標示された旗門を監視し、選手が旗門をはずさず通過したかどうか確認の上万が一不通過の場合、ゼッケン番号、所属都市、不通過の旗門番号、不通過の状況等のメモ、並に棄権の有無等を記入した用紙を旗門係長が集めて廻り決勝審判、記録係に届ける任務に終始した。

出発審判、出発主任は選手の出発をスムーズに運ぶ為に絶えずゴールの係員と連絡しあい、選手の正常なスタート(スタートバーを蹴って飛び出すタイミング)を支持しながら競技進行の役割を果たした。

ゴールでは、光電管に記録された選手一人一人の数字を読みとり、記録係はゼッケン番号、選手名、都市名、タイムを正確にカードに記入し、表示板に貼示、選手や関係者に競技状況を広報した。

大回転競技(四部門)が終了し、午後1時半より始まった距離競技は一周1000メートルを女子、青年、壮年一、二部の計4名がリレー形式で滑走し早さを競うもので、小旗でもって方向づけされたアップ、ダウンのコースを懸命に走り抜き多数の応援に応える力走によって

有終の美を飾った。

大会の結果は、ホストの重責から選手団の事は監督にお世話になったが、選手各位の健闘により念願であった準優勝を勝ちとる事の出来た事は望外の喜びであった。

ホストとして不可欠な大会を運営できて面目を保つ事ができ、事務局や役員の努力が報われて苦勞した甲斐があった事を喜び合うと共に、この大会を成功させる為に終始ボランティアな立場で最善を尽くしていただいた役員の方々に深い敬意を表し併せて、改めて最良とはどうする事であり、最善とはどんな事かを考えさせられた。



第47回四都市体育大会冬季大会 準優勝(平成11年2月7日・大江山)



## 志賀高原スキー教室

志賀高原は私どもスキーヤーにとって最も魅力的で忘れられないスキー場であります。

- スケールの大きさ（広大、各所に亘って散在するピステとリフト等の機動力=70基）
- 積質の素晴らしさ（乾燥粉雪）
- 景色の美しさ、広大な眺望等兼ね備えた憧れのスキー場だからです。

協会として志賀高原のスキー教室を事業の一つとして位置づけ企画し実施してきてより本年度19回目を迎えました。一つの事業が途切れる事なく継続してきた点、大きな成果によって裏付けられている証左といえます。



そもそもこの志賀高原のスキー教室を協会の事業として取り上げた動機といますかその契機となったのは、学生時代志賀高原の高天ヶ原スキー場に於て開校されていたアールベルグスキー学校（ホテル第一多喜本を拠所）のアシスタントとして活動していた久木康弘氏（現副会長）が昭和51年、大学卒業を機にSIAの検定に合格し、アールベルグスキー学校の専任の教師として多くの生徒の指導に当たった。その後家業の関係上昭和55年帰郷し、翌56年協会の有力スタッフとして迎え入れた事から志賀高原のスキー場の素晴らしさの紹介を受け、早速翌57年第一回のスキー教室の実施に踏み出した事がはじまりでした。

当初は教室として技術に応じてクラス別のレッスンを取り入れた計画で事を進めたが、生



憎協会内に指導者が少なく現地で技術の指導をお願いした。第2回目（昭58年）のスキー教室においてレッスンを受けた後、SIAの検定会を実施して会員の技術向上を図ったりしたが、その事が会員の好評を受け、スキー教室は回を重ねるに従って年々その輪が広がり、実に参加延人員が1200名を数えるまでになって参りました。協会の催行してきたこの教室の特色が

人気を呼んで数多くの参加者を得、しかも途切れる事なく19年のロングランとなってきているのは、人生の縁は「出逢い」によって始まるという点を最も大切にし、バス1台の中に乗り合わせた一人一人は昨日まで全く見知らぬ人であったが、教室での出逢いによって気心を通じあう友となり、また仲間として交際する間柄に進展して親交を暖め合うようになったり、はたまた恋人としての交際から人生の伴侶となる等の人間関係が生み出される場となってきた事であります。

次に出逢いを深める懇親パーティを初日の夜設定しお互いに疎通を図る催しを持っている点であります。勿論飲みものやつまみ類はすべて参加費で賄うが、3泊4日の行程にしては破格の料金で実施している（協会内の指導スタッフ一同全てボランティア精神の発揚のもとで体制づくり=協会内の指導者の体制ができてきた）。

三つめは、「教室」と謳っている事で、2日間は、初心者、初級、中級、上級にクラス編成の上、それぞれのクラスに指導員が無料で張り付いて終日レッスンに当たっている事です。3日目はフリー滑走とし、志賀高原での滑りの醍醐味を満喫して帰郷したものである。

このレッスン体制のもとで技術の向上を目指して精進した上級クラスの中から、SAJの検定（1級）に合格する者も増加してきている点で受講者の期待感も高まってきている。

次にスキーは生涯スポーツとしての意味あいから、高齢化の進む状況の下で参加する対象をシニアまで枠を広げて実施している事にあります。ここ2、3年は80才を越える高齢の方や、40代~50代の初心の女性の方も参加されています。高齢の方には転倒によるケガの心配もありますが、お互いに注意しあい斜度やコースを選んでの滑走で幸い今まで無事故で教室の運営ができています。今後も充分注意を払い実施をと考えています。

最近雪上のスポーツも様変わりしてきていますが、その一つにスノーボードの普及発展し、志賀高原も昨年まではス

ノーボードは禁制であったが解禁となり、スキーとボードがピステを賑やかにしている昨今です。

このような中で来年（2月9、10、11、12日）の連休には20周年の節目を迎える記念のツアーを企画し、楽しく実のある催行にしたいと考えています。





## ジュニアの発展について

ジュニア部の発展には岩上 保先生を語らなければならない。岩上先生はスキー協会の今でも顧問として、何時までスキー協会の発展に貢献をして頂いている所ですが、昭和63年に協会事業とは別に先生が現役で学校で教鞭をとる傍ら、生徒の冬の課外指導にスキーを取り入れ自主的に、バスの手配、会費の徴収、そして参加者の募集と、1人3役も4役もこなされて来た所です。校長先生に昇進されたときに、スキー協会の将来への人材育成の大きな事業の位置付けとし協会の運営にして継続をするべく希望もあり、検討の結果、協会担当者が事務処理並びに、スキーの指導も引き受けた次第です。

ジュニアの会の発展をさせるには岩上先生の運営方法と違った観点でどういう運営がベストか検討の結果、親の会を作り親も一緒に参加をして頂き、子供の成長を見守れる方法が最良であろうと考え、同意を求め運営一切任せてしまう事からスタートした所です。親の会の結成をお願いした経緯は下記の通りの表によるが平成3年12月に市民センターで発足。すでに今年で11年目に入ったところです。親の会の皆さんには2年重ねてお世話になった人もあり、(又親の会代表者の皆さんのお名前しか掲載していませんが、お許し頂きたいと思えます。)多くの会員の皆さんと一緒に、子供の成長を見守ってきた所であります。本当に深い理解を頂きご協力を願っています事は、今後の綾部を背負って行ってくれる人材作りに大いに貢献できている事と、感謝申し上げます次第です。

年 度	親の会代表者氏名
平成3年度	浅 卷 節 子
平成4年度	赤 尾 寛 子
平成5年度	吉 田 ひさ子
平成6年度	福 井 いずみ
平成7年度	荒 木 嘉 忠
平成8年度	吉 田 ひさ子
平成9年度	山 本 博 美
平成10年度	守 谷 まさ子
平成11年度	梅 垣 実枝子
平成12年度	金 賀 和 世
平成13年度	栗 原 立 子



長野オリンピックのラージヒルジャンプ台を見学

(上記の保護者代表のみなさんに運営をお世話になった次第です。)

ここでもう一つ大事なことは、指導員の協力への感謝であります。勿論ボランティアでスキーシーズンの短い中、休日を割愛し最優先に指導に当たってくれた皆さんにはこの紙面をお借りし、感謝を申し上げる次第です。木下・荻野・山下、久木・榎原・本郷・上原(麻)・上原(季)・橋本の各指導員の方々、多くの皆さんに支えられ今日まで来ました。特に指導員有資格者の榎原博志氏・久木康弘氏の充実した生徒達への指導が功を奏し、今ではジュニアが成長し、有資格者が生まれている事です。何時までも継続をし、発展する事を常に願いジュニア出身者がジュニアの育成にかかわってくれる事を期待しています。



〈信州コルチナススキー場にて〉

## ジュニア部の主な活動

例年シーズンインの1月～3月の3ヶ月に亘ってスケジュールを組む。これは、コーチ陣の関係から練習日を最大限5回として、月別に1月2回、2月2回、3月1回と振り分けして実施している。しかし時によっては積雪等スキー場の状況によって、中止せざるを得ない事もあった。

通例は1月の第1回の練習会は1泊2日の日程によって宿泊を伴う練習会としている。宿泊する関係からスキー場も当初奥ハチのゲレンデを利用していたが、スキー場の経営方針もあってボーダーを解禁にされた事から、コースの混雑がひどくなりその上部員の一人がボーダーに撥ねられる事故が発生、今後の事を考えて安全に練習できるスキー場をという事で、ニュー小代スキー場に変更した。





〈志賀高原横手スキー場にて〉

変更するに当たっては、シーズンイン前に、協会の役員（会長、副会長、ジュニア担当者）がスキー場の責任者を訪問し、活動にかかる諸事情を前提に折衝して、登行のリフトの搭乗についての対策やリフト利用の割引等の特別の配慮を頂くという協力のもとに進める事ができた。勿論シーズンになると親の会の役員の方が中心になって、事前連絡の上手配万端を整えて練習会をスムーズに運ぶ事ができたのである。月別に予定している練習会への参加人員は、少ない時でマイクロバス1台、多い時で2台（コーチ陣はマイカーで行く事もあった）。練習内容としては、ジュニア3級、2級、1級のクラス別の他に、全く初めてスキーを履く初心者もあって、指導に当たるコーチも最少5名は必要となっていた。従って協会として、シーズン前にコーチとしての承諾をもとにしたコーチ人名簿を作成し、親の会との連携の中で相互理解のもとに練習会の体制をとっての実施であった。

宿泊練習会も、部員の構成（小学3年から中学、高校生まで）も年齢の高低、男女の混成等の関係上食事の量、部屋の割り当て、宿舎における集団生活上のマナー、就寝までの時間の過ごし方、就寝時間や起床時間等々に亘る諸注意から眼くばり等、付き添う親の会の役員の献身的な配慮、行為によってこそ成功裡に実施できたものである。

他の3回は日帰りの練習会で、集合は早朝の5時、日常の生活のリズムにない行動であるにも拘らず遅刻する者もなく参集、目的地まで2時間余りのバスの中は殆ど寝不足をカバーする為の睡眠で経過する。大体现地に着いて身支度を整えゲレンデに立つのは9時頃となる。午前中のレッスンは、それぞれのコーチの引率のもと適当な休憩も取りながらで、正午前に昼食をとるため小屋入りをするが、すでに付添い当番により混雑する日曜日の山小屋でありながらジュニアの予約席を確保されていて、ゆっくり座席にて順次用意されている食事を済ませる事が出来るよう行き届いている（事前の折衝の中で協力要請し受け入れの結果）。

午後はクラスによって開始時間は多少の差はあるが、練習の終了時間（下山時間は3時半）には全員集結し、午後4時帰路に着く。途中夜久野ドライブインにて休憩するが、その間部員各自が自宅と連絡し迎えを依頼、特別な事情のない限り大抵は午後7時過ぎに帰綾ができ、

迎えの保護者にレッスン報告をして練習会を終了する。

次にシーズンの総括として3月末（1回）、小・中・高の終業式後（26～31日）、3泊4日の日程にて信州（志賀高原、八方コルチナ）へ遠征を実施している。最近（H11～12年）は、行き来に費やす時間や経費の面から、3月の末でも滑走可能なスキー場（鳥取氷ノ山若桜スキー場）に足を運んでいる。

平成5年は、志賀高原熊の湯スキー場にて3泊4日の日程で実施、参加部員28名（小男8、小女4、中・高男9、中女7）コーチ4名、保護者9名（男2、女7）総計41名の人員にて催行する。春3月の末ともなれば志賀高原の雪も朝のうちはクラストしていて、滑りも抵抗が少なくスキーの操作も楽だが、午後になると重くなってスキー操作に苦勞する。しかしシーズンの終わりの事として、部員の殆どは様々な斜面に挑み無難にクリアしていく姿から、シーズン中の成果が挙がっていると見られる。

翌年は横手スキー場に遠征、次の年は信州コルチナススキー場へコースの変更、平成7年～平成10年まで4年間続行。

遠征に関し親の会の会合も屢々開催されていたし又、終了した時点での反省会も持つ中で問題点や課題の確認もされている。

次にジュニア部員の練習会への感想並びに活動の全般に亘り、親の会として留意すべき事項や部員としての心得等を総括された記録をもって、ジュニア部の活動の纏としたい。



〈奥ハチスキー場にて〉



## 今回のスキーツアーを終わっての感想

- 門 美里 (高一): すべり方が“八の字”からまっすぐになってきたのでがんばります。麻美先生にジュースをおごってもらったので、ありがとうございます。
- 門 麻美 (中一): 私のくせは、ターンの後半に足をはったままで、まげずにいました。でも、麻美先生に意識をしないとできないと言われ、してみるとできたので、麻美先生ありがとうございます。
- 荻 志津香 (高一): 板がそろようようになってきた。最初の方こけたけど、こけなくなった。
- 竹村 知紘 (高一): 今回初めてでいきなり検定で、めっちゃしんどかった。でもその分上手くなったような気がする。怖いものがなくなりました。
- 村上 芳春 (小六): ターンをもっとしっかりしたい。
- 貴田 和樹 (小六): ターンを細かくしたい。
- 谷川 博紀 (小六): 小回りが上手くなるよう来年頑張りたい。
- 本田 雄大 (小六): 急なところでもすべれるようにしたい。
- 山本 誠愛 (小六): 楽しかったから、よかったとおもいました。
- 本田 耕大 (高一): まだ急斜面になると、思うようにすべれないけれどこれからの課題としてがんばりたいとおもっている。
- 村上 昌陽 (中一): 二回目の信州にいて、上の方をよくすべれて楽しかったです。また来年も行きたいです。
- 上田 一暁 (中一): はじめて長いこと泊まってスキーをしました。最初はぜんぜんだめだったけど、きゅうげきに成長しました。来年も行きます。
- 高瀬 克彦 (中一): ターンをこまかくして、急なところですべれるようにしたい。楽しくできてよかった。
- 四方 浩志 (中三): 今年一年間スキーに行って、けっこう上手くなったと思う。来年は受験であまり行けないけど、またいきたい。
- 大槻 裕子 (中二): だいぶ上手くなってきたので、来年もがんばりたいです。
- 四方 智浩 (小六): 雪が悪くてすべりにくかったけど、あとですべれるようになった。努力できてよかった。
- 先生に悪いところを教えてもらって、直せかけてよかった。
- 角倉 雄樹 (小六): 最初の方はすべれなかったけど、あとですべれるようになった。努力できてよかった。
- 梅原 泰央 (小六): ひさびさのスキーだったけど、楽しくできてよかった。来年も来たい

と思います。

- 山口 雄弘 (中二): 練習をして上手くなれたけど、更に上手くなれるように頑張っていきたい。一日目は雨で残念だったけど楽しかった。
- 守谷 泰範 (中二): ひさしぶりにスキーができてよかったです。楽しくすべれてよかったです。また、来年も来たいです。
- 梅垣 拓典 (高二): あつかったけど、おもしろかった。
- 村上 博文 (高二): 一日目はすべれなかったけど、いい練習ができてよかった。
- 長浜 弘和 (小六): もっと上手くなれるようにがんばって練習する。
- 小森 真人 (小六): 春スキーで雪質が悪くて初日は思いどおりにすべれなかったけど二日目ですこし上手にすべれるようになり、三日目はパラレルに近いすべりができたのでよかった。来年はもっと上手くすべれるようにがんばりたい。
- 竹村 美紀 (中二): すっごいこぶの所、こわかった。でもおもしろかった。来年は一級をとりたい。
- 長浜 美佳 (中三): こけた時、めっちゃいたかった。谷足にちゃんと乗ってすべれるようにがんばりたい。
- 梅原 明子 (中三): 私はいまだに“八の字”なので、板をそろえるようにがんばりたいです。先生たち親切に教えてもらってありがとうございます。
- 荻 亮一 (中一): もうちょっとしっかりすべりたい。

## 信州スキーツアー反省 (部屋毎)

はくばやり:

今回は、男子のお風呂で起こったことで、女子は関係がないと思ったけれどやっぱりもう一度考え直すと、こういうことになったのは、私たちが問題が起こるような雰囲気にしてしまった事が、いけなかったと思います。

そして、男子のことだけでなく、私たち自身考えてみると、ごみを捨ててしまう、時間が守れない、先生が話されているときや寝るときとか騒がしい、忘れ物をするなど自己管理ができないことでした。これらのことは、私たちの中では何も感じないことなのかもしれませんが、社会に出ると、迷惑をかけることばかりなので、自分の責任は全体責任につながると思うので、ルールを守り、自分自身の行動を見つめなおしたいです。

からまつ:

①お風呂はみんなで使うものだから、みんな、正しい考えを持って入れればよかった。



- ②一人一人が自分を見直してこの反省を生かしたい。
- ③タオルを湯舟につけている人を注意すればよかった。
- ④お風呂のマナーを守って入れればよかった。
- ⑤お風呂に入る時に体を洗ってから入れればよかった。
- ⑥お風呂でもなんでも、みんなで使うものだから大切に使う。
- ⑦一人一人が注意して入れればよかった。
- ⑧決まりを守って入れればよかった。
- ⑨お風呂を正しく入れればよかった。

#### ごりゅう：

毎年お世話になっていたのに、今回ルマメウさんにご迷惑をかけてしまって悪いと思っています。今後は、規則を守って一つ一つの行動に責任を持って、楽しくスキーをしたいです。

#### コルチナ：

じぶんが、自分のことばかり考えず、団体としての行動をとるようにする。今までは、自分勝手に行動していたのでわるかったと思う。ルマメウの人たちには、迷惑かけてすいませんでした。

#### しゃくし：

われわれ一同は、だれがやったかわからないけど、みんなの責任としてとてもせきになんかかっています。だからこれからは、みんなが注意しあっていきたいと思っています。ルマメウのみなさまには、ご迷惑をかけたことをお詫びします。

#### 1. 確認事項

1) ジュニア部は、先生方のボランティアで成り立っています。休日を返上し、家族を家庭に残して、仕事も自分の遊びもせず、報酬もないということ、ただ、子供達にスキーの楽しさを知ってもらいたい、上達してもらいたい、そして人間として大きく育てていく時期に、少しでも役に立ったら、と願っておられる先生方の『お気持ち』を親の会としてもよくよく理解しておいていただきたいと思っています。

また、先生方のお付き合いの中から子供達にいろいろな点で、優遇されたり、配慮していただいたりする事が多くあることをお知りおきください。

2) 親の会の役員は今まで入会年度の順番にほぼいただいています。お忙しいとは思いますが、役員さん相互でよくお話をさせていただいて、助け合ってお役をしていただくようお願い致します。

#### 2. 練習会の報告

☆バスの乗り降りの時、集合時間を守ろう。運転手さんに『こんにちは、ありがとう』など言われなくても、“あいさつ”をしよう。

☆バスが着いたり、出発の時は、荷物を運ぶ“手伝い”をしよう。

☆“靴”はきちっとそろえよう。

☆宿泊練習会の部屋割にたいして、基本的に変更はしない（みんなが言い出すと、收拾がつかなくなるので）。

☆生理用品の後始末をきちんとしてほしい（ご家庭で、もう一度教えてあげてください）。

☆大勢で入浴する時のエチケットの確認。

☆宿泊練習会の時、部屋、布団などにカメムシが大量にいて、気持ち悪くて眠れない子、気分が悪くなる子がいた。（ニューオジロ）

☆宿泊練習会、新館と旧館の“差”があり過ぎた。また、別棟のため、当番の目が行き届かなかった。（ニューオジロ）

☆着替えの場所が川の近くで危なかった。駐車場の方で着替えを済ませてから移動をするように、先生方に連絡する。（ニューオジロ）

☆宿泊練習会の前の説明会で、登行リフト乗車の時、スキー・ストックは袋に入れて持って上がり、当番が袋を上で預かる申し合わせをしていたが、先生方に十分理解していただけてなかった。そのためストックを落とす子がいた。今後先生方にもご理解いただくようにします。（ニューオジロ）

☆ごみの始末について：バスの中での“ごみ”は各自持ち帰る。宿泊先では、各自袋に入れて、指定されたごみ箱に入れる。

☆リフトホルダーについて：『腕に通すタイプ』は、着替えの時に落しやすく、宿泊先の従業員の方や当番が大さがしをしました。

リフト券は、お金と同じであること、無くなったら、その日一日中リフトには乗れないこと、大切にしようと子供達に話をした。首から下げるタイプ、グローブに引っ付けるタイプなど先生方と検討する予定です。

#### ☆信州練習会の報告：

◎夜10時出発、翌朝5時12分着、その間2時間おきにトイレ休憩を取る。寝にくい態勢、寸断された睡眠時間、次の日の予定が朝からナイターまでの練習、など、疲れからけがをしやすい。夜の出発を早朝出発にしたらどうか等考えてほしいという意見が出た。

◎27日一日中雨のため、練習は中止、午前中部屋にて待機（休憩）。午後から、オリンピックで使われた『白馬ジャンプ競技場』見学。（京都交通の運転手さんには、お疲れの所、気

持ちよく連れて行っていただきました)

◎27日夜：夕食の時「窓の外にスリッパ、ペットボトルなど、捨てるな!」「風呂にバスタオル・下着・靴下の忘れ物があった、取りに行くように。」と、山下コーチより注意があった。

小雨の中、ナイター練習に出発(子供達、やっと滑ることができました)。

◎28日(晴)：午前中練習、午後ジュニア1級～3級検定試験

お風呂事件：27日午後5時過ぎ、練習を終えた男子が入浴のためお風呂に入った所、変なものが浮いていると報告。修理の結果、24時間循環風呂の吸い込み口に、タオルが詰まっていた。

お昼に入った時は、大丈夫であった。宿泊客は私たちの団体だけのため、故意ではないが責任がないとも言えないため、全員で反省をし、ルマメウさんへ謝罪をしました。(その後溶けかけていたパイプの交換、3時間後に復旧。処置が遅ければ火事の可能性もあったということを知り、恐ろしいことでした)

スリッパ事件：反省会をしている間、当番が子供達に聞いた所、前夜スリッパを投げたのではなく、隣の部屋に行くのに、ドアのかぎを開けてもらえなかったため窓から入ろうと、屋根にでて滑って落ちた。落ちたところが1mずれていたら庭石があり、スリッパが落ちていたのを注意されるくらいではすまなかった。

信州ツアーも今年で6年目になります。コルチナには4年間お世話になっています。子供達には、慣れた宿泊所、慣れたスキー場ということで“油断”があったのではないのでしょうか。子供一人一人はとてもよい子ですが、遊びやいたずらの中で、悪い条件がそろって大きな事件につながることを、お当番として、親として今後気をつけなければならないと反省しました。

◎9時より認定書授与、パーティー、ゲーム：ジュース、お菓子は先生方より差入れをしていただきました。ルマメウさんからは、氷・コップ・場所の提供をしていただきました。(持込み禁止の中)

### 3. 保護者の皆様へ

☆宿泊・日帰りいずれの練習会の時も、帰宅予定時刻のお知らせの他、急な連絡をする場合があるかも知れません。出かけられる時はその旨と、留守の時の連絡先を役員まで知らせておいてください。

☆練習会の出欠を入金によってお知らせいただく方法を取っていました。一度に数回分を振り込んでいただくと、会計係が混乱しました。来年度は方法について確認してから入金してください。

☆第4回練習回中止の連絡をしたとき、木下会長、山下副会長宅へ抗議の電話をされた方がおられました。急な決定事項の連絡でご迷惑をかけたが、天候・ゲレンデの雪の状態・子供達の安全等、ぎりぎりまで考えられての決定でした。今後もそのような決定がなされるかもしれませんが、そのような行動は謹んでいただきたいと思います。

☆ストックの忘れ物(信州ツアーにて)を預かっています。お心当たりの方は、守谷までご連絡ください。

☆ゼッケン：洗濯、アイロンをかけて返却してください。総会の時に持って来てください。  
☆写真代について：1月の10、11日に行かれた方は、返金が済んでいますので総会のときにいただきます。ご準備ください。(信州ツアーに行かれた方は返金分から差し引きます)

### 4. その他

☆スキーはご承知のように、随分お金がかかります。「積立をしたらどうでしょう」と役員から提案致しました所、役員さんに任せず、各家庭で何らかの方法を考えて準備することで意見が一致しました。よろしく願います。

☆信州コルチナスキー場で、先生方のリフト券(2日券)を無料にいただきました。ルマメウ支配人と山下コーチが、スキー場と交渉していただいたようです。

☆練習回の前にしておいたほうがよかったと思われること。

◎宿泊説明会の時、子供達で集合して“たてわり”の班分けをして、班ごとにリーダーを決め、役割分担を考え自主的に行動するようにさせる。

反省会をもたせ、行動のチェックも自分達でさせる。3月28日の反省会の後の、部屋を片付けた子供達の行動は素晴らしいものでした。やる気になればなんでも頑張れることを、見せてくれました。

◎宿泊説明会の後、お当番、役員でスケジュールや子供達について話し合い、役割分担をしておく。

☆数年に一度、北海道ツアーを組んでもらえないか。子供達に北海道のパウダースノーを経験させてやりたい。練習会の励みにもなるのではないか。費用の点も、信州ツアーとそんなに変わらないこと、疲れが少ないことなど、意見が出ました。また、冬休みなど雪質のよい時期に思う存分滑らせてやりたい。年末に信州ツアーをしていただく事は無理だろうか、保護者の皆様から意見が出ていました。今後の検討課題として、先生方や来年度の役員さんに話しておきます。



## 綾部市スキー協会ジュニア部

### 級別検定規定

- (1) 受験資格 受験者は当スキー協会に所属するジュニア登録会員であること。
- (2) 実施 検定会は綾部市スキー協会の主催で行う。(認定は協会内認定)
- (3) 検定員 検定員はSAJ公認指導員を主任検定員とし、その他は綾部市スキー協会会長が指名した者でSAJ1級以上の資格を有する3人以上の構成とする。
- (4) 目的 基本的に検定により合格した者は、次年度の綾部市スキー協会が主催するSAJ公認基礎スキー技能テスト(級別テスト)に受験資格が与えられる。(但しジュニア1級に合格した者に限る。)  
そのことが、ジュニアの技術レベルの向上と現在の技術レベルの判断が出来る  
次年度の目標とすることが出来る。
- (5) 実施種目 ☆ジュニア1級(SAJ公認検定3級目標)  
①ステッピングターン踏み出し  
②パラレルターン大回り  
③パラレルターン小回り  
☆ジュニア2級(SAJ公認検定4級程度)  
①ステッピングターン踏み出し  
②直滑降  
☆ジュニア3級(SAJ公認検定5級程度)  
①プルークボーゲン  
②直滑降
- (6) 要領 ジュニア1級の場合  
①ステッピングターンの場合  
パラレルポジションの舵とり動作  
平滑な緩、中斜面20×100m 4回転  
②パラレルターン大回りの場合  
オープンスタンスでストレッチングで伸ばし動作で切り換え  
4回転動作  
③パラレルターン小回りの場合  
オープンスタンスでリズムカルに両足の同調  
平滑な緩、中斜面10×70m
- (7) 合格基準 それぞれの満点100点に対する70%以上が合格である。  
その他は主任検定員と協議の上決定する。

## 回想の記

### 私のシュプール

並松町 吉野雄策

いまさら遠い昔を回想せよと云うのが無理なのか、ウイスキー片手に追想に耽っているのが悪いのか、左手のグラスは軽くなるが右手のペンは一向に進まない。

一口に50年と云ってもそれは大変な歴史の積み重ねである。赤松君の事、頼さん骨折の事、鉢伏の尾根でブリザードに遭って危うく遭難しかけた事、4月の下旬に大久保の谷川でスキーを洗って、武夫さんと一緒に氷ノ山に手を振りシーズンに別れを告げた春山スキーの思い出、ETC…ETC。思い出はつきないが、それらはそれぞれ皆さんの楽しい青春の一頁としてお楽しみいただく事として、私自身の50年を振り返ってみる事にした。

昭和2年、この年私は初めてスキーをはいた。その頃の上夜久野はまことに雪深い里で、一夜に1メートルを超える事も珍しくなかった。翌年小学校に入ってゆきかえり12軒の道を豆スキーをはいて、転びながら通学したのを覚えている。当時、子供用のスキー等田舎では手に入らず、親戚に器用な人がいて大きいスキーを縮めて杖と一式プレゼントしていただき、大いによろこんだのを覚えている。その頃夜久野駅のすぐ裏に夜久野ヶ原スキー場（毎日新聞社後援）があって、土地柄もスキー熱が高く、学年が進むにつれ近所の大人達や先輩達にひっぱられ、日曜ともなれば終日スパルタスキーを叩き込まれたものである。

まずはスキーをはいてまっすぐ歩く事にはじまり、坂を登る事、スキーをはいてのコケ方と起き方（骨折を防ぐ為に）に杖を利用した崖のズリ落ち方（山では大いに役に立つ）、その次が滑り方で、リフトもゴンドラもない当時は、滑ろうと思えばその山が何百米あろうとも自分の足で登らねばならない。歩いて歩いて、登って登って、はじめて滑ることが出来る。一冬中これを繰り返している内にスピードと急斜面に対する恐怖心がなくなり、年を重ねて何処でも思い切った滑降が出来るようになった。足腰のバネも強くなって、重いリュックを背負っていてもバランスがくずれず、少々のコブなら平気でこなせるようになった。

神鍋の北の壁も直滑降で飛ばせば100軒近いスピードが出て、眼鏡なしでは目から涙が出る。真白い大きな壁をチェックを入れながらのんびりとトラバースするのも楽しいが、直滑



降の魅力とスリルには勝てない。

新婚旅行で大山に行った時、豪円山のシャンツェの横を直滑降で飛ばした思い出は楽しいが、伊吹山のオーバーハングしたように見える南壁のくずれは、さすがに斜滑降で安全策をとった。

ノルウェー式ビンディング、カンダハー、ラングリーメンと締具も変わり、滑り方にも色々なメソッドが入ってスキーの板もヒツコリーは昔の思い出になった。

春が来て冬が去り、又春が来て冬が去り年を重ねている間に息子も26歳の社会人となって、私と同じようにスキーを覚え、いつしか信州あたりのスキー場の名を口にするようになった。ある秋の夕方、京都嵯峨野の小さな店で盃を交わしながら、「おやっさん、春になったら一緒に立山へ滑りに行こか」「よし、行こう」「きっとやで…」と二つ返事で交わした子供とのかたい約束。然し、この約束は遂に果たされぬまま昭和52年11月14日、私と家内は立山室堂平の稜線に息子の為に小さなケルンを積んで手を掌せた。

立山の雪は毎年小さなケルンと共に、果たせなかった二人の夢をやさしく包んでくれるにちがいない。

立山にケルンを積んで私のスキーは終わった。

## スキーの思い出

石谷 郷太

「神鍋に行けば腹一杯飯を喰わしてくれる」誠に不純な動機ではありますが、私とスキーとの出会いはこのようにして始まりました。昭和19年冬、毎日空腹を抱えて鳥取で学生生活を送っていたとき豊岡出身の友人に誘われ、井鉢でウズラ豆の混じった白飯を食べることが出来ました。

当時の神鍋は北の壁とその東側の緩いスロープだけの狭いスキー場でした。へっぴり腰で滑っている私の前で、北の壁に設けられたジャンプ台を、先生に引率された地元の小学生が全員ジャンプする様は誠に驚異でした。

綾部中学校に勤務していた昭和25・6年頃、亀岡の越畑にスキー場が開設され、早速乾先生始め故佐々木晃君などが出かけましたが雪が少なく滑れず、神鍋に行こうとの話が纏まりました。30人ほど乗れるボンネットバス1台チャーターし、有志を誘って朝5時綾部駅前集合勇躍出発しました。当時の道路事情は今の方には想像できないほど悪く、今も夜久野辺りに見え隠れする旧9号線は、車1台がやっと通れる幅です。対向車と出会う度バックの連

続で、神鍋到着は12時頃、実に7時間の行程でした。帰路が思いやられて2時出発。バスに懲りて汽車に変えましたが、当時スキー人口は少なく、込み合っている列車に長いスキーを持ち込むものですから乗客からは白い目で見られたものです。

37歳のとき、医者から1年間運動を禁じられ、本業も忙しくてそれ以来スキーとは疎遠になりました。10数年前久しぶりに神鍋に参りました。若い頃は滑り降りたらスキーを担いでひたすら登ったものですが、至る所にリフトが設置され、その余りの変貌ぶりに只々驚くばかりです。

当時綾部のスキー人口は数十人と少なく、町で出会っても同好の士といった親近感を感じましたが、このようなことが綾部スキー協会結成の基盤になったと思います。当時を振り返って

## スキーの思い出

鈴木 正利

私が初めて神鍋スキー場に行ったのは昭和27年。その頃は市内の運動具店には未だスキーは並んでいなかった。先の尖った単板のスキー板を人から譲り受け使用した。自家用車もないので列車を利用して江原で降りバスで神鍋へ。スキー場に早く着きたいために苦労した。綾部からの列車に乗ればスキー場に着くのはお昼前になる。福知山発を利用すれば早くつくので、何とか間に合わせたいということで福知山までトラックで運んで貰うことを考えた。当時、トラックとて個人で所有している人など余りない。運転手さんに無理矢理お願いして、冬の早朝4時にトラックの荷台に乗りこむ。荷台に乗るのは違反とかで見えないようにシートを頭から被せて貰って駅まで。冷たい風が身にしみるのを我慢して運んで貰った。2回ばかりこの要領で行ったことも思い出として残っている。同じ頃、越畑スキー場開き（京都市右京区）に行ったこと。新聞で知り、八木駅まで列車で、駅前からバスに揺られること約1時間。何でも愛宕山の裏側に位置するということで、スキー場まで麓から狭い山道をスキーをかついで登ること50分。

スキー場開きの関係で地元の人々やスキーヤー達が大勢頂上にいた。ところが積雪が少なく、肝心の滑りが出来ない。岩膚が現れ、スケートをしているような感じで転倒するものならそれは大変である。何とか無事に時をすごした。スキー場のオープンなので、初めて開かれた山小屋でのカレー。食器もスプーンも新調されたばかりで、印象に残っている。狭い登山道をスキーをかついで復路についたのも、今から思うとよくぞ行ったものだとわれながら

感心する。このスキー場は現在利用されているかどうか、全くわからない。

## スキーに魅せられて

木 下 實

初めてスキーの板を履き雪上に立った時からすでに47年が経ちます。よくも飽かずにスキーを続けてきたものだと、自分ながらに苦笑しています。

毎年シーズン近くになると雪が降ってくれるかな、とかそろそろスキーの板を新調しようかな、ウェアもよく着込んだので替えてみようか…等、年齢の事も忘れhighな気分になって友人を誘い、スキーショップへ出かけたりします。

そもそも私がスキーを始めたきっかけは、市の北部の比較的雪深い奥上林小学校に勤務していた昭和29年のこと、学校長として赴任されて来た今は亡き間島源一先生の一言にありました。「若い者がこんなにたくさん雪の降る所において、スキーが出来ないなんて勿体ないぞ。」と仰り、早速スキー用具を取り寄せ「さあ、やれ！」と言って指導を受けた事が雪恋病の始まりとなりました。勿論スキーの道具は高価なものでしたから、校長先生の顔で月賦(月500円)で支払うことにして頂きました。

週末になるとスキー場に出かけましたが又これが大変で、降雪によって道路事情も悪くなり中丹バス(今の京都交通)も中上林止まりでしたので、屢々奥上林からリュックを荷台にスキーを肩にしての自転車こぎ、4、5kmの<sup>の</sup>道程ではあったが本当にしんどい思いをしたものです。当時のスキー行は大抵列車を利用(綾部駅発深夜=0時過ぎの下関行)、江原駅で下車し早朝始発のバス待ちをしながら夜明けを迎えたものです。しかも全但バスも時には積雪多量の為、入山不能で山麓の栃本から凍てついた山道を辿りながらの苦行でありましたが若さ故でしょうか、またスキーの出来る嬉しさからかそんなに苦しんでゲレンデへと足を運んだものです。

その頃スキー場はリフトの設備もなくすべて徒歩、喘ぎながら斜面を登っては5、60mも滑り下りれば又登りの繰り返しであり、技術の向上どころか疲労による意欲の減退もある中で休み休みの有様でした。その上用具も粗末なものであり、技術も下手で転んでは滑り、滑っては転ぶといった調子でしたから、靴下はグシヨグシヨ手袋はビシヨビシヨ尻はベツトリ、スキーの板にしても金属エッジが付いているわけなし、ソールもラッカーを塗って滑走の性能を保つといった具合ですからアイスパーンはとても滑れたものでなく、ラッカーが剥げ落ちて滑りが悪くなることも度々でした。ひどい時には雪に引っかかってスキーが止まっ

てしまうことさえあり、パラフィンをこすりつけては滑るといった状態でした。又その上寒さも加わってスキーどころではないこともありました。私と同じ頃にスキーを始めた仲間も一人罷め、二人去りましたがどうしたことかバソをかきながらもスキーの魅力にとり憑かれた私は、雪を求めて彷徨の中でいろいろな方と知己を得、私の人間形成の上に大きな財産を与えていただきました。そんな中で大先輩である山下武夫氏や吉野雄策氏(前会長)のお二人や仲間の金田忍氏、大槻奨氏等とご一緒させていただき、ツアーのノウハウを教わりながら近在の山々(大江山をはじめ鉢伏山、氷の山等)や遠くは伊吹山、立山、白馬、乗鞍等の山々へツアーを試みました。就中、山下、吉野の両先輩に連れて行って頂いた猛吹雪の中の鉢伏ツアーでは視界不良もあってコースを誤り、転落寸前九死に一生を得た事もありました。その夜大久保の宿で炉を囲みながら、今頃は「茶毘」を焚いて冥福を祈っていたかも…と酒の賄にされ大笑いした事も懐かしい思い出です。

昭和30年代の後半、荻野昭氏(現副会長)がスキーの仲間に加わりよくご一緒にスキーに出かけましたが、中でも白馬へ春スキーに出かけ黒菱のコブ斜面で悪戦苦闘した事は今も眼前に彷彿としてきます。このようにして私は時間と経費の許す限りスキーに惚ける青春でありました。

スキーをやり始めてからの思いにとにかく一日も早く上手になりたい、の一心から貪欲に技術を求めておりましたが、図らずもインパクトを受けたのが昭和30年代の前半信州白馬山麓のスキー場、泣木山コースの急斜面を、白馬高校の生徒がスキーのテールを押し出しながらキレのある鋭い回転弧を画いて、いとも簡単に滑り下りている姿を眼にした時でした。

コンマポジションによる脚部の捻り押し出しのポイントを実感として以来、私のスキーの目標を生み未だにその技術を追い求めているのですから、呆れたものです。

スキーの事を語るに枚挙にいとまがありませんが、只言える事は、一つの物事をやりかけたら納得のいく答えが出るまで諦めないでやり切る事が大切ではないかと思っている次第です。

## 記念誌の発刊に寄せて

森 山 譽利生

「光陰矢の如し」と申しますが、綾部スキー協会が設立されて早50年の歳月が経過し、その間多くの先輩諸氏並びに現役として活躍中の皆様方の尽力によって、今日を迎えることができました。



思い返せば私がスキーを始めた頃は、日曜日を待ち兼ね早朝の列車や深夜の下関行きの車両に乗り込んでのスキー行でした。帰路の車中はアルコールを手にワイワイガヤガヤと盛り上がる中で、綾部のスキーが話題となり会費を出して活動してはどうか、という事で確か昭和30年の初め頃でしたが、これまでのクラブ的な会から、会費制をもとにした組織として出発することになりました。会長に吉野雄策氏（当時は中丹バスの観光課長）をお願いし、会費の募集と年間会費（月100円）集めから活動を開始し、バスによるスキー行も企画、実施しましたが、当時は道路の事情も悪く折角の運行も積雪のために中止にしたり、途中下車（夜久野止まり）のスキー行であったりしました。

その翌年（昭和32年）当時体育協会の会長でありました由良金一氏の支援のもとに、綾部市スキー協会として手続き（当時の事務局は丸岡章作氏と私森山が担当）の上、再出発する事になりました。

四市のスキー大会が公式種目になった第13回大会（昭和40年）以降、4～5年は選手の活躍も報われず4位定着でしたが、近年は選手の技術も高くなり上位の入賞も果たすことができ大変嬉しく思っております。

長いスキー歴の中で不名誉な勲章に次のような事がありました。今は懐かしい思い出です。

昭和34年の1月、吉野会長を先頭にして大笠コース＝（大江山＝当時未整備）の斜面においてポール練習をしていた時の事です。一番最初に出発し2本目のポールに入る手前で重い雪に先端を引っかけてその場で転倒し、左足を骨折するというアクシデントに見舞われました。折よく近くにいた木下氏（現会長）が、自分の板と私の板を合わせてソリにし、仲間の人達の運び降ろしのご苦勞をいただいて下山、岩戸まで来ていた自動車で綾部市内の福井病院まで担送してもらいました。本当にその節にはご迷惑を掛け、大変お世話になりました事今も忘れる事はできません。

長い間のスポーツの活動を通し、今は亡き今枝会長様には、物心両面に亘りご指導ご支援を受け感謝を致しております。特に昭和36年に体育協会の理事として推挙されて以来、今日まで微力ながら協会の発展に尽くして参りました。今後とも綾部スキー協会の一員として協力して参りたく思っております。

後になりましたが、綾部スキー協会50周年を迎えるに当たり会員の皆様方の一致団結と協会の益々の発展を祈念致します。

## 今もスキーを

金田 忍

創立50周年おめでとうございます。スキー仲間の皆さんにはあれほどお世話になっておきながら、日頃にご無沙汰ばかりで申し訳無く思っております。

何しろ30年以上も昔の事であり間違ってもいけないと思って年表やアルバムで調べましたところ、私がお世話になっていたのは昭和40年（30才）前後の数年間だったようです。

当時の会長は、今は亡き今枝俊二氏で有級者としては現会長の木下實氏の1級を筆頭に2～3名しか居ないという有様で、四都市スキー大会も毎年最下位の屈辱に甘んじておりました。聞けば今は指導員、準指、有級者が大勢おられ、将来を担うジュニアの指導にも力を入れて居られるとか、現会長をはじめ指導に当たってこられた皆さんの情熱と弛みない努力に敬意を表します。

一番の思い出としてはやはり四都市スキー大会でしょう。私にとっては唯一の競技歴ですが、どうしたものか壮年の部で優勝してしまったのです。賞状を見ると昭和41年にゲンゼで開催された第14回大会でした。アルバムの記念写真を見ると、あの頃の皆さんの懐かしい思い出が甦ってまいりました。スキーだけを接点とした人間関係は何時までも汚れが無く新鮮です。

スキーに関しましては今でも現役のつもりです。調べてみたら今年は17日間滑っております。ゴールデンウイークの立山雄山谷滑降が毎年の滑り納めの慣わしになっております。それにしても年々仲間が減っていくのは寂しいものです。年金生活なのでゴールドクラスは無理ですが、エコノミークラスの機会がありましたら是非お誘い下さい。

最後になりましたが、綾部市スキー協会の更なる発展と、皆様のご健康をお祈り申し上げます。

## 回顧録

荻野 昭

私がスキーを始めて今年で40年近くになる。社会人になり職場の先輩に神鍋スキー場へ連れて行かれたのがそもそもの始まりであった。長い板をつけての滑走の難しさは今も脳裡に焼きついている。当時は用具も粗末なもので、スキー靴はゴム製ですぐ靴の中がビショ濡れになったものだ。2年位して当時高価な合板のスキー板と皮製のスキー靴を購入し、夜行列車で神鍋スキー場へ行ったものである。現在のようにリフトも整備されておらず、滑っては

登り滑っては登る非効率的な練習に明け暮れていた。スキー学校もなく唯先輩の姿を見よう見まねで滑っていたのを思い出す。昭和38年頃神鍋スキー場にて、木下会長の華麗なウェーデルンを見てため息をついたものである。以来木下会長の指導を仰ぎながら40年近くスキーを続けている。その間2回の大ケガをした経験が今も強烈な印象として残っている。最初は鳥取大山の元谷の雪渓で4月29日に八合目から五合目迄滑落して奇跡的に助かったことと、もう一度は万場高原でアイスバーンに足を取られリフトの鉄柱に衝突し前歯3本を折り、あわやあの世行きの危険に逢ったことである。幸い一命をとりとめ、現在もスキーを楽しんでいる自分の強運に聊か驚く時がある。何故自分がスキーにこれ程迄に魅力を感じて続けられたのだろうか。それは大自然を相手にするスポーツだからと思う。又技術が向上するにつれてスピード感を満喫し遠心力に対抗する醍醐味は経験者でないと実感出来ないと思う。特に雪質の良い整備されたバーンを滑る時や新雪を滑る時の楽しさは格別である。このスキーの楽しさを満喫する為、現在も基礎体力作りに毎朝ジョギングを続けている。このジョギングがエスカレートしてフルマラソン迄になり、この本末転倒ぶりに自分ながら苦笑している最近である。この楽しいスポーツを一人でも多くの人達に体験して欲しい思いで、及ばずながらジュニアの指導とスキーツアーでの初心者への指導も続けている。

こんな楽しいスポーツを1年でも長く続け、充実した余暇人生が満喫出来たらこの上ない幸福である。またもう一つの趣味であるゴルフにも、基礎体力養成とバランス感覚の育成に役立っていることを自分としては嬉しく思う次第である。

## 年 齢

### 大 槻 獎

昨年の冬、突然スキーの虫が起き、久しぶりに大江山で滑って来ました。スキーを履くのは15年ぶりのことでもあり、60歳を越えたオヤジが一人で来て怪我でもしたらカッコ悪いという気持ちが先に立ち、初心者ゲレンデでぼちぼちと滑ろうと心に決めていました。しかし一旦スキーを履き、2~3回滑った頃にはその決意もどこへやら。峠道の向い側の斜面が懐かしくなり、いつの間にかそちらに足が向いていました。リフトが上に行くにつれ、その風景の変わりように年月の経過をひしひしと感じました。コースが整備され長いリフトがつけられたこともさることながら、私の目をひいたものはコースの両側に植林された桧の成長ぶりです。

四都市大会の選手として初めて私が出場させていただいたのは大江山の大会です。たぶん

昭和35年くらいだったと思います。貸切りバスで宮津回りで行きましたが、その頃は道路事情も悪く峠の途中の岩戸の村で下車、藁葺き屋根の集落の間の旧峠道をあえぎあえぎ登ったものでした。3~40分かかってやっとスキー場に着いたとたん余り休む間もなくすぐスキーを履き、スタート地点であるパラボラアンテナ塔に向かって登行開始です。最初の急斜面を登り切った辺りから、桧の植林してある比較的広い斜面がアンテナ塔まで続いていました。桧は植えて間もなかったようで雪面から1メートルくらいしか出ておらず、コースの切り開きも狭かったせいか、滑降中に枝の先がストックに接触しピチピチと音を立てたのを覚えています。

あれから40年。桧も年輪を重ね立派に生長した風景に出会い、感慨深い思いで滑って来ました。

綾部スキー協会も50周年を迎えられ立派な組織となりました。21世紀を担う若いメンバーの皆さんの力で、これからもより一層素晴らしいクラブに育てていただくことを切に願って止みません。

## ス キ ー の 想 い

並松町 今 枝 昭 子

50周年おめでとうございます。

最初に、父が永年に亘り協会の会長を務めさせて頂きましたことに対し、深くお礼申し上げます。

思い起こせば、中学生の頃山好きだった父に連れられ神鍋スキー場に行ったのが、ゲレンデに立った最初でした。当時は早朝一番の汽車で江原駅へ行きバスに乗り換えて、終点の麓の小学校で下車し、荷物を背負って1時間ほど歩いてやっとゲレンデに到着、そこには北の壁に1本のスノーポートがあっただけだったと思いますが、ほとんど歩いて登り登った分だけ滑る、その繰り返して、リュックの中のリングが昼食時には凍っていたこともありました。おにぎりを寒風の中でおぼり、休む間も惜しんで滑ったものでした。

今のようにゲレンデの傍まで車が入るようになったのは、ずっとずっと後のことです。

協会の活動が始まり、ご一緒させて頂くようになって、基礎から教えて頂く機会が出来たにもかかわらず身に付いた変な癖は直せず、それでも楽しく滑っていた頃、大会に出ることを薦められ合宿に参加して、ポール潜りの特訓を受け競技に臨みました。それから数年後昭和43年2月の第16回四都市大会が大江山で開催された時、優秀な方の欠場も幸いして予期せぬ一位でカップを手にした時は、信じられぬ思いでした。因にスポーツ系で優勝カップを手



にしたのは後にも先にもこの時だけです。

その後二人の子供に恵まれ、小さな二人を両わきにかかえリフトに乗る等パワフルに楽しみました。子供達は教室に入れて頂いたお陰で、瞬く間に上達し親を追い越してしまいました。還暦を過ぎた今日、4年前に買い換えた板と靴が出番のないまま放置しているので、来年は是非一度久々にゲレンデに立ってみたいと思っているこの頃です。

今後益々の協会の発展を祈念致します。

## 青春とスキー

大久保 泰 宏

平素は貴協会に対し、お世話になりながら御無沙汰続きで失礼致しております。

この度発足50年の式典を開催されるに当り、心よりお慶び申し上げます。

私がスキーを始めたのは、昭和38年就職した年の初めての冬でした。翌年秋に大阪へ転勤になり、その年の11月末に友達の誘いで、立山の初滑りに参加しました。そこで雪山の美しさとスキーの魅力に、すっかり取りつかれる事になる。40年雪燕というクラブに入部する。リーダーの山根さんという方は、氷の山出身で全日本スキー連盟の指導員をされておられる方で、それはすごいハイレベル、どんな厳しい斜面でも、深雪、ベタ雪、アイスバーン何でもござれで、まさしく雪上の仙人と呼ばれるにふさわしい人でした。

昭和43年に退職し帰郷したのですが、その前年にはキチガイになったおかげか、出張旅費をもらって講師をやらせてもらったり、箱館山スキー学校で三浦雄一郎率いる、ドルフィンチームの講師（アルバイト）も経験しました。その年は50日程滑った様に思います。

帰郷後、友人の奨めで貴協会の強化合宿に参加したのが初めての出逢いでした。昭和46年の四都市の大会に於いてチャンピオンを頂き、自分でもビックリしました。超まぐれはもちろん、無欲の勝利とはこの事。

当時スネーク（高速ウェーデルンターン）をマスターしようと、木下先生、荻野昭さん、大概奨さん等と雪を求めて走ったものです。その当時より木下先生は、若くてチャレンジ精神旺盛で、今尚かつ御活躍の様子に頭が下がります。ところが私が35才の時、母親が脳血栓で倒れ、子供も小さかったので看病等でだんだんと遠のき現在に至りました。近年木下先生や山下信ちゃん等に誘われましたが、体力に自信がなく、最近ではゴルフ一本です。

残念に思う事は子供達を一度もスキーに連れて行ってやれなかった事、わがままな父親を今も続けております。貴協会の御発展を祈っております。失礼しました。

## スキーの思い出

四方 昌 光

幼い頃から、外で遊ぶ事が好きな私は、冬雪が降ると、手製のソリや竹スキーを持って山へ出かけ、暗くなるまで滑って遊び、服もビショビショになって家に帰り、母によく叱られました。大きくなっても、やはり雪は大好きで、昭和37、8年頃からは、スポーツ店でスキーと靴（その頃はまだゴム製でした）を借り、夜行列車で神鍋スキー場へ行きかけたのが病みつきになりました。ボーナスをはたいて高いスキーや靴を買い、自分では結構うまくなった気分で、楽しいスキーシーズンを毎年過ごしました。

先輩から誘いを受けて四都市の大会に向けてのポール練習に行き、まるで闘牛の牛のようにポールに突っ込んで、派手に転倒していたのも楽しい思い出になりました。

その頃は、スキー協会＝四都市でしたが、最近ではスキーを楽しむ人達も増え、協会員も増える事により、上級者も集まり始め、レベルアップしてきたと思います。反対に、体力が衰え始めた私は、最近スキーに行く回数もめっきり減りましたが、「白銀の世界」に身をおいているだけで心が躍る気持ちは今も変わりませんので、いつまでも元気でスキーを楽しみたいと思っています。

後になりましたが、綾部スキー協会を支えて来られました役員の方々の御苦労があつてこそ、本年度50周年の輝かしい節目を迎える事が出来たものと、敬意を表し、益々の発展を祈念申し上げます。

## 競技スポーツ組織として更なる発展を

小 寺 哲 朗

20数年前になると思います。当時、競技スキー志向のメンバー数人が集まり近辺の草レースに参加したり友達を誘い合つてポール練習会を行っていました。メンバーの数も10人が20人、20人が30人と増えクラブとして活動しようとホワイトライナースキークラブを発足させました。とにかくポール練習がしたくて竹藪から竹を切り出し赤と青のペンキを塗りポールを作りました。そしてチームウェアを作るためや公認のポールをかうため、資金稼ぎに志賀高原へスキーバスを出したことなどを懐かしく思い出します。現在もそれが協会でも引き継がれ毎年開催されているようです。

当時、協会では競技スキーへの取り組みは殆どされておらず、四都市大会前にポール練習を1日する程度でした。協会の運営も年功序列型で若い個人の会員の意見を聞いて頂ける機会もありませんでした。そこで我々は、それぞれのクラブ代表者により協会運営していくクラブ制導入と、競技スキー取り組みの第一歩としてクラブ対抗スキー大会の開催等を提案しました。我々の意見が通りクラブ制導入とクラブ対抗スキー大会の開催は実現しました。当時、耳を傾けて頂いた協会役員には感謝し、敬意を表する次第です。しかし、加盟クラブが減少したり市民スキー大会、クラブ対抗スキー大会の開催が数年前に打ち切られたことは残念でなりません。

協会へ加盟されている以上、スキーをレクリエーションスポーツではなく競技スポーツとしての位置付けを再確認して頂ければと思います。近年、綾部からも市民スキー大会等がきっかけで競技スキーを始めた選手が、全中やインターハイ、国体等へ出場し活躍しています。

府連との連携を密にされ各種大会への参加やジュニア層の育成、以前の大会の再開そしてクラブ数の拡大を図られ競技スポーツ組織としての更なる発展を期待致します。

## スキー協会での思いで

山下 信幸

私がスキーとの出会いは小学3年ぐらいだったと記憶しています。それから数えて40年を優に過ぎ、今、将にスキー協会の歴史が50周年という輝かしい歴史の中で関わりの深さを感じています。大学生活が終わり、郷里綾部に帰ってきたときから、スキー協会との付き合いが始まった。それはまさしく異業種間の付き合いであり、人との関わりの中で大きく成長をさせて頂きました。スキーは自分との戦いであり、孤独なスポーツ競技である。しかしながら、1人でプレーするにはつまらないスポーツであり又、仲間と、連れ立って行きたいと思うスポーツであります。不思議と私の場合は、先輩諸兄に半ば強制的に連れて行って頂き教えて貰いました。昨今やっと技術的にも楽しめるスキーが出来るようになり正に面白くなっている所です。

又、今日まで経過する中で、事務局もして来ました。仕事との両立を図り、時間を有効に使う事、楽しむ事、色々と関わりの中で、50周年を迎え、いよいよ自分の、自分の為に過ごすスキーをさせて頂く節目を迎えたと思っています。

木下会長・荻野副会長・久木副会長・榎原理事長それぞれ、どの人とも、年齢こそ違いますが同じ世代の人達という錯覚を持ちながら、一緒に人生有意義に過ごせるときに大切にス

キーを愛し、一生の友として、共に楽しみたい。そんな事を考える毎日です。

50周年事業が秋に開催される中で、早く冬が来ないか、新しいスキー板を準備し、首を長くして待っている所です。スキーは年齢に関係無く死ぬまで自分の体力と相談しながらであれば、何時までも楽しめる生涯スポーツです。そんなスポーツに出会った人生にシーハイルと叫んでみたい。

## スキーシーズン

久木 康弘

各地で初冠雪の便りが聞かれ、スキーシーズンがやってきた。私はこの季節になると子どものように心が躍る。長野県下高井郡山ノ内町志賀高原。東洋のサンモリッツと呼ばれる国立公園志賀高原スキー場は、私の第二の故郷である。

その青春をかけた志賀高原は、サンバレースキー場から始まり、新設された焼額山スキー場まで、その数22カ所と文字通りマンモスゲレンデである。

最高峰は裏岩管山(2,329メートル)。スキー場では横手山(2,305メートル)の頂からの眺望が最高で、晴れた日には日本アルプスが眼前に広がり、その後方には富士山がはっきり見える。一面白銀の世界である。そして樹氷林間コースを一気に滑り降りる。3キロのダウンヒル。粉雪を舞い上げ、風をきり、全身で味わうこの爽快感は筆舌に尽くしがたい。

一方、発湯温泉からゴンドラリフトに乗れば、東館山(2,030メートル)の頂上に着く。眼下は私のホームゲレンデ、高天ヶ原スキー場である。ここからは奥志賀、寺小屋、一の瀬の各スキー場へもツアーができる。また、東館山よりブナ平、ジャイアントを越え、丸池サンバレーまで滑れば4キロコース。竜王越えツアーともなれば約20キロ。お弁当を持って遠足だ。

それらはすべて思い出のゲレンデだ。初めて足を骨折し、ワイフと出会った。インタースキー(世界スキー指導者会議)志賀大会、毎年S I Aフェスティバル、世界のそして日本のプロスキーヤーとの交流会、プロの世界に入って10年間、インストラクター時代の出来事など。

数年前、焼額山スキー場はあの「私をスキーにつれてって」の映画の舞台となり、ますますスキーは若者のトレンドイースポーツとなった。

私はこの年になっても白銀の世界では万年青年でありたいと思っている。血湧き肉躍る限り、それは青春である。シーハイル(スキーヤー万歳)。



## スキーの思い出

永井秋夫

綾部スキー協会が発足をして50年、この輝かしい大きな節目を心からお祝い申し上げます。又この時期に協会の一員として一端を担って来られたことに深く感謝するところです。

今日までスキーに係わって来たことを思い出しますと、少年時代には雪もよく降って、山にある神社の坂道や川原の堤防で竹にカマボコ板を打ちつけた竹スキーで近所の悪ガキどもと日が暮れるまでよく遊んだものです。そんなことで小さい頃より雪にはなんとなく愛着を感じスキーをすることに憧れを持っていました。

ある時、四都市大会の選手として出場する名誉を受けることが出来ました。ボーゲン、<sup>3</sup>い  
わゆる足をハの字に開けて滑ることが出来るぐらいの時です。故今枝会長が元気で頑張っ  
て居られ監督は中学時代の担任だった上原幸一先生でした。「こけたらあかんでよ、なんとか  
下までいけ」これが私に指示された作戦でした。若かったんでしょう、途中あぶない所もあ  
ったがなんとかゴールすることが出来ました。結果は6位に入賞、大変にうれしかった心に残  
る思い出です。この大会には梅迫町の久保さんが青年の部で優勝され、四都市綾部万年4  
位だったのが初めて3位になった記念すべき大会でもあったように思います。その時に役員  
の方や関係者には大変お世話になっていることを痛感して、ご苦労に感謝をした次第です。

一時期、体調をくずしてスキーを苦痛に感じる頃がありましたが、スキーで得た先輩や仲  
間に励ましや助言を頂いて何とか回復をすることもできました。スキーを通じて多くの人と  
同じスポーツをすることで、数多くの良き先輩や仲間に出会えたことに感激をしています。

今後は人と人との出会いを大切に、スポーツをすることで健康の増進や体力の向上に頑  
張っていきたいと思っています。

## 四都市大会デビュー戦

出口則明

私が大学を卒業し綾部に戻って来たのは、昭和56年でした。その当時は、教職員免許取得  
のため、冬期はスキー場でインストラクターをし、夏は家の手伝い等をしていました。

スキーは子供の頃からしていたのですが、熱が入りだしたのは、高校時代からだったよう  
に思います。そして、大学に進学すると、基礎スキー部に入部もし、いよいよどっぴりとス  
キー一色の生活が始まり、今日に至りました。

どこで知られたのか、久木さんが、このような様子を耳にされ、綾部市スキー協会へと誘っ  
て頂きました。そして、四都市大会へも出場させて頂く事となったのです。

初めて大会へ出場した時、勢い余ってか、フライングをしてしまい、急ぎスタートへ登り  
直し、もう一度滑り出したのですが、心境「なるようになれ!」という、開き直りが功をそ  
うしたのか、その時の一本が、これまでの四都市大会の最高タイムであったと思います。残  
念ながら、ゴールしてみると、時計係が時計を止めていた為、もう一度滑る事となり、当時  
は今のようにリフトなど無く、スキーを担ぎ、急ぎ登ってはみたものの、もうくたくたで、  
スキーどころでは無く、結果途中転倒するハプニングにも見舞われ、不本意な結果となりま  
した。忘れもしない、これが、もう17年前の四都市大会のデビュー戦でした。

その後、連続で大会にも出場させて頂き、昭和60年には関係者の方の力強い応援、又その  
当時付き合っていた家内の黄色い声援もあり、青年の部で優勝することができました。

近年、インストラクターとしても、スキーよりもスノーボードを履く事が多くなって  
きた為、スキー技術についていけない今日この頃です。しかしながら、スノースポーツとし  
て、どちらも楽しんでゆきたいと思っています。

## スキークラブの思い出

日東精工株式会社 平岡玄吉

この度、貴協会が創立50周年を迎えられましたこと誠におめでとうございます。日東精工  
のスキー部に入部した昭和50年当時当社スキー部にはスキー愛好家は多くおりましたが、そ  
の多くはスキーが履ける程度の実力で、スキーが上手になりたいという気持ちを持っている  
ものの、スキー教程をマスタした指導者の指導を受けたことがないという状況でした。その  
ような時に、貴協会から久木理事長を紹介いただき、シーズン中にはほぼ毎週末に熱烈な指  
導を受けることができました。この熱烈な指導のお陰で、当社スキー部から志賀高原スキー  
ツアーを企画できるまでにスキーヤーの数が増え、その回数を重ねることができました。こ  
の間、ツアー定員に満たない時には貴協会加入の市役所、四峰、田子作のクラブ員に助けて  
いただき、無事ツアーを継続することができ、その後の貴協会活動で仲間意識が広がってい  
たことを覚えております。

また、貴協会の活動の中で、昭和56年から開催されておりますクラブ対抗スキー大会には、  
特に印象深いものがあります。この大会には、貴協会のご厚意で大阪勤務のクラブ員も参加  
でき、普段顔を合わせない社員間の親交と結束に大変役立ちました。中でも、昭和58年の第

3回大会では四都市大会出場選手が少ない中、当クラブ員が優勝できたことは忘れられません。この時の勝因は、上位に入賞するようなクラブ員はいないものの、中位に数多くの当クラブ員が入賞して、他クラブの得点を阻止できたことでした。トップクラスのスキーヤーがいなくても、並のスキーヤーが多くいれば、優勝できたことから、おかげさ言えば人生の教訓を学ぶことができたと思います。

思い返せば、20数年貴協会には感謝することはいっぱいです。貴協会のますますのご発展を祈念いたします。

## 綾部スキー協会発足50周年に寄せて

本郷 実

まず持って、綾部スキー協会発足50周年おめでとうございます。

私が、田子作スキークラブを通じスキー協会とお付き合いをさせて頂いてから20年近くになります。こうしてスキーというスポーツを長く続けていられるのもスキー協会が作る、スキーの環境に恵まれているからだだと思います。そして環境というのは人間関係に他ありません。技術的にはプロの資格や指導員の資格を持った方もおられ、教育に携わった方に、経営者、金融関係に公務員。こういった人間性あふれた方たちとの触れ合いや語らひは綾部スキー協会です。これからの方たちとのお付き合いを大切にさせて頂こうと思っております。

そして、スキー協会が作る人間関係は「志賀高原スキー教室」の実施で毎年新しく増えていきます。私もスタッフとして毎年のようにスキー教室に参加させて頂いていますが、今年はどんな人に会えるだろうかと、毎回楽しみにしています。スキー教室に参加して頂いた方を田子作スキークラブに迎え入れられたら。それこそ思う壺。スタッフの一員としてこれからのスキー教室を実施しなければと思っております。

日本には四季があって、24節気は2週間に一つ、72候なら4日に一つ季節が変わる国にあってスキーが好きというのは、同じような肌の感受性を持っているからではないでしょうか。どこか気が合って当たり前、気の合う人たちの集まりを大切に、これからの綾部スキー協会の発展に期待して止みません。又、微力ながらそのお手伝いが出来ればと思っております。

## 綾部市スキー協会との出会い

玉井 ひとみ

綾部市スキー協会発足50周年、おめでとうございます。それ程の歴史があるということを知りました。回想録執筆の依頼を頂き、誠に光栄に感じております。

まず、私とスキーとの出会いは、20歳の頃学生だった私は卒業旅行と称して、友人とスキー旅行に行ったのが始まりです。それから社会人になり、ウェア、板、全てを揃え、スキーの話があればどこへでも行き、風邪を引いてもスキーをすれば元気になれる程、スキーにぞっこの私でした。しかし、無我夢中なだけで、基礎は全く無いといった感じ。そんな私が実家、綾部にUターンして一年後24歳の時、綾部市スキー協会に属する“田子作スキークラブ”を知り、入会した訳です。あの頃は、“楽しかった”の一言。冬になると毎週休日になる前から、ワクワク、スキー色の毎日でした。

市民スキー大会に、クラブ対抗スキー大会、近年無くなったのが残念ですがあれは楽しかったです。各クラブ毎に競い合い、盛り上がりました。優勝出来たのも私の人生の「宝物」となっております。綾部市スキー協会主催のバスツアー、「白馬コルチナ」に「志賀高原高天ヶ原スキー場」、親切丁寧な指導をして頂き、バッヂテストを受けるまで上達しました。1級を取得出来たのも、協会・クラブのおかげだと思っております。私のスキー人生は協会、クラブの存在無しでは語れません。今現在、主婦で子供もいて独身の頃のように、スキーを楽しむ事は出来ませんが、近い将来我が子にも私の経験した事を体験させてやりたい！一緒にスキーを楽しみたいと、あの楽しかった時代を思い出しのスタルジーに浸っています。このような良き思い出の裏には、企画、運営されていた方々有っての事であると思ひ、感謝しております。今後も、当協会の発展をお祈りし筆を置きたいと思ひます。ありがとうございます。

## スキーと出会って

亀井 早百合

スキー協会50周年、おめでとうございます。スキー協会、田子作スキークラブがあったから、今の私があるのだと思ひます。

昭和59年に田子作スキークラブに入り、60年に四都市大会に初めて出場しました。まだスキー歴も浅く、ポール経験もほとんどない私が、大江山のポールを必死で滑り降りたのを今でもはっきりと覚えています。



それから毎年、四都市大会、クラブ対抗、市民スキー大会など参加させていただきました。志賀高原のツアーにも毎回参加し、クラス別の講習も回を重ねるごとに、上級へと移行していき、SAJ 1級の認定もいただくことができました。その頃には、冬の休日は必ずと言っていい程、スキー場において、「どうしたら、もっと上手に滑れるようになるのか」と、久木さんや協会の人をつかまえては、教えていただいていたように思います。どんなに寒くても、吹雪でも、1本でも多く滑ろうとしていた自分が、今は懐かしく思われます。

家庭を持った今、そんな事はできなくなってしまいました。雪を見ると心が騒ぐのは昔と同じです。今でも時間が許せば、滑りたいと思っています。とは言っても、年に3~4回行くのが現実なのですが……。

もう少し子供が大きくなれば、一緒に滑りたいなと思っています。今度は悩みながらのスキーではなく、楽しむスキーができればと思っています。

最近、クラブ対抗や、市民スキー大会が開催されていないようですが、又ぜひ再開して活性化を図り、益々の協会の発展をお祈り致します。私も、まだまだ現役でスキーを楽しみたいと思います。

## 平成6年度ジュニアスキー親の会

荒木嘉忠

50周年記念おめでとうございます。

顧みますと、小学生の時にお世話になりました娘も、はや高校2年生、改めて、光陰矢のごとしの感を深くしております。

平成6年度に、親の会の係を引き継ぎましたが、12月のスキー用品交換会の失敗（多くの参加者があったにもかかわらず、提供者1名のみ）に始まり、第1回の練習会は直前の平成7年1月17日に起こった阪神淡路大震災により中止等、散々なスタートでした。

どうなることかと思っておりましたが、木下会長始め、コーチの方々の深い愛情と熱意あふれるご指導の下、子供達も次回の練習を心待ちにし、上達して行く様子を先生方に撮影していただいたビデオでも確認できた事は、係としても楽しいことでした。

初めての試みとして取り入れた奥ハチスキー場での一泊練習、恒例の信州スキーツアーと、成功裡に終了することができましたのも、ひとえに先生方の献身的なご指導と、世話係あるいは当番として朝早くから参加し、御尽力いただいた保護者の皆様のお陰と深く感謝致しております。

とりわけ、木下会長には責任者として集合時から解散に至るまで心身にわたる御苦勞をおかけし、山下副会長には、都市計画道路新設に伴う社屋新築で御多忙なにもかえりみず、度々会社に押しかけましたことを申し訳なく思っております。

役員を離れた後、ジュニアスキーに関しましては『あやべ市民新聞』で、時々関係記事を拝見するくらいになってしまいましたが、ますます発展・充実の様子が伺え、うれしく思っております。

御指導いただきました子供達が、いつの日か綾部スキー協会会員として活躍し、そして、今度自分たちが、次の世代を指導してくれればと願っております。

最後になりましたが、お世話になりました先生方、協会の皆様方のご多幸と、スキー協会のますますの活躍を祈念して筆をおかせていただきます。

## 綾部市スキー協会創立50周年にあたり

山田修司

綾部市スキー協会創立50周年の記念すべき時を迎えられたことを、心からお慶び申し上げます。この記念すべき年を、多くの方々がさまざまな思い出とともに懐かしくお迎えになれることと存じます。一口に50年と言っても、その年月の重みは相当なものがあり、スキー場のない綾部市で地道な努力を続けてこられた、諸先輩の熱意とご努力に心より敬意を表します。

私も1984年からの数年間、綾部スキー協会に所属させていただいたことがあり、志賀高原や白馬乗鞍スキー場へのスキーツアーなど思いで深いものがあります。中でも、志賀高原へのスキーツアー参加希望が多く一人でも多くバスに乗っていただくため、日東精工の温井君とスキーをトラックで運んだ事は懐かしい思い出となっています。また、国体予選に初めて出場したのもそのころでした。結果はさんざんでしたが競技スキーの魅力に感動し、その感動から覚めないままに今も走り続けているように感じています。

真っ白な雪山に立ち、この雪原を自由に滑り降りることができたらどんなに気持ちよいことだろうと、夢を実現すべく努力する姿は昔も今も変わりなくスキーヤーを雪山にかりたてています。近年、マテリアル、リフトの機動力、スキー場へのアクセスなどスキーを取り巻く環境はめざましく発展変貌し、ハンデキャッパーもピステにたてるようになってきました。なにより安全性の向上はめざましく、70歳80歳を越える年齢のスキーヤーを数多くスキー場でも見かけます。

マスターズスキー大会も各地で開催され年々盛況です。いまやスキースポーツは、あの青春の感動を生涯の感動として持ち続ける事ができる生涯スポーツとなってきました。自然への畏敬と親しみ、感動、出会いと触れあい、親睦中でスキーを愛し、苦しみや疲れを乗り越えさまざまな感動を共有し、手応えをあげよう事のできるすばらしいスポーツとして今後の発展を願ってやみません。

節目に当たり、創立の精神を半世紀にわたり継続してこられた役員の方々、諸先輩にあらためて敬意を表し、綾部市スキー協会が数多くのスキーヤーに白銀にかける喜びと感動を与えていただける場として、益々の発展とさらなるご活躍をされることを心より祈念しお祝いの言葉とさせていただきます。

(京都府スキー連盟マスターズスキー専門委員)



# 綾部市スキー協会規約

(名称)

第1条 本会は、綾部市スキー協会（以下「協会」という。）と称する。

(事務所)

第2条 協会の事務所は、事務局担当理事宅に置く。

(目的)

第3条 協会は、綾部市体育協会に属し、スキーの普及発展及び技術の向上と協会員の親睦を図ることを目的とし、併せて関係団体と協力し地域の社会体育に寄与する。

(事業)

第4条 協会は、目的達成のため次の事業を行う。

- (1) 各種スキー行事の実施並びに協力。
- (2) スキー技術の講習、指導及び研究。
- (3) その他、目的達成のために必要な事業。

(組織)

第5条 協会は、綾部市内におけるスキー団体（クラブ）等をもって組織する。

第6条 協会に加盟するための団体の組織は次の通りとする。

- (1) 加盟団体の人員は原則として5名以上の会員が在籍すること。
- (2) 加盟団体は、会員の名簿及び代表者を協会に報告すること。

(役員)

第7条 協会に次の役員を置く。

会長 1名 副会長 3名 監事 2名

2 必要に応じて総会の承認を得て相談役を置くことができる。

第8条 会長、副会長は理事会において選出し、総会の承認を得る。

2 会長は協会を代表し、副会長は会長を補佐し会長に事故あるときはこれを代行する。

第9条 理事は、加盟団体所属の会員中より1名選出する。必要に応じて理事会の承認を得て会長推薦の理事を選出することができる。

2 理事長は理事の互選により定める。

第10条 監事は、会長が委嘱する。

第11条 役員任期は2年とし、再選出を妨げない。

2 役員に欠員が生じたときは、後任役員を選出し、任期は残任期間とする。

3 新たに加盟した理事の任期は前項と同一にする。

(運営)

第12条 理事は、協会の運営、企画、立案、執行及び単位団体の連絡等に当たる。

第13条 総会は年1回とし、必要に応じ臨時に開催することができる。

2 総会の議長は、会長が務める。

3 理事会をもって会長が必要と認めた場合、これを総会に換えることができる。

4 理事会は、必要に応じて会長が招集する。ただし、理事の2分の1以上の請求があったときは、ただちにこれを招集しなければならない。

5 会議は、原則として構成員の2分の1以上の出席がなければ開くことができない。

6 会議は、出席者の過半数をもって議決する。

7 協会の事業を運営するために理事会の決定を得て専門部を置くことができる。

(会計)

第14条 協会の運営は、次の収入をもってこれに充てる。

(1) 加盟団体の加盟金及び分担金。

(2) 事業収入。

(3) 補助金、寄付金。

(4) その他の収入。

第15条 協会の会計は、10月1日に始まり翌年9月30日に終わる。

第16条 第14条に定める加盟金及び分担金は、次の通りとする。

(1) 加盟金 1団体3,000円

(2) 協会登録料 1会員年間1,000円

(規約の改廃)

第17条 本規約の改廃は、総会で決定しなければならない。

第18条 本規約の施行に必要な細則は、理事会において定めることができる。

附 則

本規約は、昭和55年10月1日から施行する。

附 則

本規約は、平成4年10月22日から施行する。

附 則

本規約は、平成5年11月14日から施行する。

附 則

本規約は、平成6年11月12日から施行する。

附 則

本規約は、平成8年10月4日から施行する。

附 則

本規約は、平成10年9月25日から施行する。



## — あ と が き —

身を切るような寒さが、かえって心地よいとさえ感じるスポーツ、スキー。その心地よさを追求するためには、時間も労力もいとわない…。そんな特異なスポーツに魅せられた若者が集まり、会を結成してから50年。半世紀の歴史に幾つもの思い出を刻んできました。

新世紀の扉の前に立った今、数々の足跡を振り返り、記録に留めることができるのも、本会を支えてくださった諸先輩方や関係団体各位のご指導のおかげと感謝致しております。また、幣誌の刊行に当たり、ご祝辞や手記、励ましのお言葉をお寄せいただいた方々に対し、厚くお礼申し上げます。

冬のスポーツは多様化していますが、今後、本会として何をなすべきか、ビジョンを明確にしながら会の運営に当たらなければなりません。スキーは個人で楽しめますが、同じ目標を持つ者が複数集まれば、楽しさは倍増します。スキーを続けてきた原動力は何だったのか…。ここで改めて原点に立ち、将来を展望したいと思います。（編集委員一同）

### 綾部市スキー協会創立50周年記念誌

平成12年11月26日

綾部市スキー協会 発行

印刷所 有限会社 ダイヤ印刷

50周年記念式  
式次第

第一部 式典

- |            |  |           |
|------------|--|-----------|
| 1 オープニング   | 司会者  | 榎原 理事長    |
| 2 あゆみビデオ紹介 |  |           |
| 3 物故者追悼    |  |           |
| 4 式 辞      | 綾部市スキー協会 会長  | 木 下 實     |
| 5 祝 辞      | 綾部市長   | 四 方 八洲男 様 |
|            | 京都府スキー連盟副会長  | 倉 敷 千 稔 様 |
|            | 財団法人綾部市体育協会会長  | 久 下 壽 夫 様 |
| 6 来賓紹介     | 司会者  | 榎原 理事長    |
| 7 功労者表彰    | 永 井 秋 夫<br>山 下 信 幸<br>塩 見 良 治<br>久 木 康 弘<br>仲久保 政 司<br>本 郷 実 |           |
| 8 功労者代表謝辞  |  | 永 井 秋 夫   |
| 9 閉 式      | 綾部市スキー協会副会長  | 荻 野 昭     |

第二部 懇親会

- |         |             |           |
|---------|-------------|-----------|
| 1 開 宴   | 司会者         | 上 原 季 司   |
| 2 挨 拶   | 実行委員長       | 山 下 信 幸   |
|         | 記念品贈呈       |           |
| 3 来賓ご挨拶 | 福知山市スキー協会会長 | 辻 本 忠 雄 様 |
| 4 乾 杯   | 綾部市教育長      | 上 原 渥 美 様 |
| 5 懇 親   |             |           |
| 6 閉 宴   | 綾部市スキー協会副会長 | 久 木 康 弘   |





